正木五瓶作
宮崎三昧校訂

春花五大力

名著文庫
東京合資會社冨山房發兌

八代目
市川團十郎

西哲の言に「肉體を養ふには食を以てし、精神を養ふには書を以てす」と云へり。就中文學は慰安の源泉、理想の糧餌にして、社會個人の文明的生活に大關係を有するもの、文學なき人は花實なき草木の如く、文學無き社會は公園なき都府に似たりといはんか。明治の洪業こゝに三十六の春を重ねて、外形粉々整備すと雖も、精神上の開拓慣らくは之に伴はず、所謂佛作つて魂を入れざるの感あり。乃ち高尚なる娯樂、健全なる文學を一般の家

庭に注入して徐に之を導かんの意、我が先達の間に急にして此の叢書を成しぬ。收むる所戯曲、小説、詩歌の純文學より史傳、紀行、隨筆、雜論に至るまで、皆慎密なる鑑査の飾を經て、一として國文學の精英ならずといふこと無し。庶幾くは社會の乾燥を醫する清爽の水たるを得んか。刻成るに臨み、校訂者に代りて聊か其の意を述ぶ。

明治癸卯三月

富山房編輯局

はしがき

春花五大力は、並木五瓶の著せる戯曲なり。五瓶は浪花の人、江戸に來りて、都座の作者となり、寛政七年此五大力を作り、當時名優と聞こえたりし三代目澤村宗十郎の源五兵衛、三代目瀬川菊之丞の小まんによりて滿城の喝采を博したりき。蜀山人の曰く、並木五瓶は、上方作者にて、江戸の青樓の詞は知らず云々、斯る作者にも、猶ほ五大力の大當りありと、こは冷語ながらおのづから上方嫌ひの蜀山人が、五大力には首肯したりしを證するに足れり。但し如何にも上方者の悲しさには、臺詞其他

總て上方臭くて、東人の耳目に慊らざるふしいと多かりと雖も、これ所謂白璧の微瑕なり。五大力以前既に五大力なく、五大力以後また五大力なきを見れば、以て此戯曲が當年の劇を代表して、綽々餘裕あるを知る可し。

書卸しの際斯く喝采を博したりし戯曲なるを以て、其以後代々の宗十郎、其他の俳優も、これを演じて、今日に至る迄、廢ることなし。こゝを以て、其正本も、亦往々好事者の手に傳寫愛翫せらると雖も、普通の傳本は、題して五大力戀緘といふ、これ今日戯に演ぜらるゝものにて、頗る後人の添竄を經たり。今こゝに校刻なせる本

は、春花五大力と題し、五瓶が書卸しの原本なり。依りて、古き姿を失はざらんが爲に、臺詞に冠する名の如きも、原本に從ひて、俳優の名を用ゐぬ、讀者閲覽の際、卷首の役割に對照するの勞を吝むこと勿れ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

澤村宗十郎、源五兵衛の役にて、五人切をなしたりし時、狂言果てゝ後、武家の最負客に招かれて、茶屋に至りしに、一人の客の曰く、宗十郎、五人斬のうち、初めの三人は、慥かに斬れたれど、後の二人は、何故か斬れざりきと、これを聞て宗十郎驚ける躰なりしが、實にさるこ

と候はん、願はくは、明日今一度御見物あらせ給へ、必ず五人ともに見事に斬りて、尊覽に供ふ可し、といふに、客も、そは面白からんとて、其翌日も來りて見物せるに、彼れの云ひしに違はで、其日は見事に斬りたりとて、大に嘆賞しつ。さるにても、如何にして昨日は斬れざりしやらん、と問へるに、宗十郎答へて、されば昨日は三人斬りて後へ廻りたる節、樂屋にて一息つき、湯を呑み、汗を拭ひて、出直り候ひしかば、全く氣の拔けたると存じ候、今日は後へ廻りても、舞臺の如く片手に行灯を提げ、片手に血刀を持ち、人を尋ぬる心にて、一周して、

出て候ひしにより、五人ともに一つ意氣にて斬り候なり、といへりとぞ。案ずるに、こは書卸しの節の事ならで、後の宗十郎の時の談なるべし、（四代目の宗十郎なるべし）有趣の談なるを以てこゝに附記す。

宮崎三味しるす

春花五大力

洲崎滿壽屋遊の場

一 藝者小万　瀬川菊之亟
一 升屋娘おこの　中村のしほ
一 升屋下女おとわ　瀬川富三郎
一 同　おちよ　瀬川雄次郎
一 藝者久米吉　岩井粂三郎
一 同　あさか　瀬川三代蔵
一 子供藝者龜吉　都　龜まつ
一 同　澤吉　澤むら源之助
一 同　鶴治　大谷廣五郎
一 薩摩源五兵衛　澤村宗十郎

一 従の三五兵衛　片岡仁左衛門
一 廻し　彌助　嵐龍蔵
一 千嶋若殿千太郎　澤村春五郎
一 近習　坂東善次
一 同　中嶋勘左衛門
一 同　坂田時蔵
一 同　片岡角太郎
一 升屋亭主　中村浦右衛門
一 出石宅左衛門　大谷廣次
其外若い衆大ぜい

本舞臺、洲崎升屋の表のかゝり、物數寄したる中門、客路次、みがき葭の腰垣、これに升屋と記したる角行燈かけ、すべて料理茶や掛り、幕の内より料理番と肴やと喧嘩して居る、若い衆とりさへて居る、さわぎ歌にて幕明く、

料理番　イヤ了簡がならない〳〵、
一皆々　マア〳〵またつしやい〳〵、
一肴や　イヤ〳〵はなした〳〵、
一皆々　イヤ、サ〳〵、おれがのみこんで居るわ〳〵、
一〇　これさ料理番殿、どうしたものだ、出入の肴やをとらへて、何をわつぱさつぱいふのだ、
料理番　イヤサ、今夜は千嶋家のお客がお入なさるゆゑ、きのふからあつらへて置たしこみの肴を、コレモウ日がくれるわ、今時分から持て來て、間にあふものか、

着や一　おれも大事の得意場だから、骨を折て持てきた注文どほり、
つッかへされてたまるものか、
料理番　モウいらないから返すのだ、
着や一　しけだからッイおそくなつたのだ、
料理番一　モウいらない〳〵、
○　マア〳〵さう云はずとわしに預けさつしやい、
料理番一　いやだ〳〵、
皆々一　マア〳〵、ムい〳〵、

ト皆々わや〳〵いうて、下座敷へつれて這入る、祇園ばやしになり、向ふより春五郎、着付羽織袴の、おろかしき若殿の拵へ、其後へ善次、勘右衛門、時蔵、角太郎、仁左衛門、廣次、宗十郎、何れも着付羽織のなり、めい〳〵奴一人づゝ、箱提灯を持ち、花道より出て來る、客路次より浦右衛門、亭主の拵へ、着付袴のなりにて、手燭を持ち、出迎へ平伏して、

浦右一　是は毎度ながら御入下され升る段、みやうがに叶ひ、ありがたうぞんじまする、是よりお通り遊されませう、
仁左一　亭主才兵衛、御案内申せ、
浦右一　へい〳〵、
仁左一　千太郎さまには、イザ、
春五郎一　オゝ、皆こい〳〵、

ト浦右衛門先に案内して、春五郎ついて這入る、是につゞき善次初め皆々はひる、

仁左一　源五兵衛殿、宅左衛門殿、
宗十郎、廣次一　まづ〳〵、

ト送ひに目禮して、仁左衛門、廣次、宗十郎、段々に路次へはひる、此道具を引いてとる、

本舞臺三間の間二重舞臺、見付一面腰障子、臘病口の方仕切のまいら戸、

臺所の躰にて、爰に料理番まな板に向ひ、料理して居る、下男大勢働いて居る、こなたは中の間の躰にて、方々に丸行燈ともし、爰に久米三郎、三代藏、藝者の拵へにて、三味せん箱にもたれ、あやをとって居る、脇に菊之亟も藝者の拵へにて硯箱を扣へ、行燈にて文を書て居る、富三郎、雄次郎、仲居まへだれがけ、銚子をかへに來て居る、さわぎにて道具留る、

富三郎 一 サア〳〵菊江さん、淺香さん、モウどなたも、おいでなされたぞえ、

雄次郎 小万さんも一所に、

菊之亟 一 アイモウ皆お揃ひかえ、

ト かまはず文を書いて居る、

雄次郎 一 こちの旦那さんはせつかちぢや程に、皆さんモウ拵へてムんせえ、

三代藏 一 久米さん、一所にゆかうぞえ、

糸三 一 サア座敷へ行くは面白いけれど、左十さんの髭ですりつけらるゝが、いやぢやわいなア、

三代 一 いつち中で千さんが、かはゆらしいのう、

富三 一 淺香さん、おまへ千さんに、氣があるかえ、

三代 一 なんのマア、あほうらしい、

ト 此内のしほ娘の形りにて奥より出て、

のしほ 一 おちよもおとわも何所に居るぞいの、 ト 皆々を見て

二人りながら奥でお手がなるわいの○是イなア、久米吉さん、淺香さん、おまへ方もちやと拵へて往ておくれいなア、

ト 此内久米三郎、三代藏、鏡袋を出して顔を直して居る、

糸三 一 サアさう思うて、今顔を直して居るわいなア、

五大力

三代一　小万さんも一所に座敷へ、ゆかしやんせんかえ、

菊一　アイ今ゆくけれど、わたしや此文一寸内へ持つていつて貰ひたいが、こちの彌助どんわえ、

富三一　彌助殿は、さつき大門屋へゆくといつて、ゆかしやんしたが、戻つてなら、おまへに知らさうわいなア、

菊一　エ、つんと急な用があるのに、爰に居てくれたがよい、○おちよどんお前を頼んで置く程に、彌助殿が戻らしやんしたら、此文を渡しておくれえ、

富三一　アイ〳〵わたしが急度渡すわいなア、　ト文を受取る、

菊一　急な用ぢや程に、間違はぬ様に頼むと、云うて渡して下さんせえ、

富三一　アイ〳〵、合點ぢやわいなア、

のしほ一　サア皆さん、座敷へいつておくれんかいなア、

菊一　アイ〳〵、サアお前方もムんせんか、

桑三一　小万さん、おまへ顔を直さんせぬか、

菊一　わたしやモウ、此儘で出ようわいなア、

雄次郎一　どうでも小万さんは、木地でも目立わいなア、

菊一　オヤ、馬鹿らしいによ、

皆々一　サアムんせいなア、

とさわぎ唄になり、菊之丞先に、皆々奥へ這入る、富三郎、雄次郎三味線箱をかゝへはひる、のしほ後を片付けて、仕切の戸を明て、

のしほ一　喜兵衛、お吸物の支度はよいかや、

料理番一　ハイようムり升る、

トいふ内献立を見て、

一のしほ　御膳迄の間に、お屋敷から來た泡盛を出せと、仰つたぞや、

一料理番　ソリヤアかん場へ、さう申して置きました、今鮟鱇の御吸物を出しまする、

一のしほ　ソリヤよからうわいの、コレお屋敷樣はむつかしいから、隨分氣を付て貰はうにより、　ト此間奥にて、手を叩くソレ御手が鳴るわいの、誰も居ぬかいの、アイ……、

ト返事しながら奥へ這入る、をどり三味せんになり、向ふより龍藏まはしの拵へにて、走り出て來る、

一料理番　オヽ彌助どん、戻らしつたか、

一龍藏　アイ大門屋に客仁が來て厶るから、一寸顔を出した所が、

丼て一つキウと、○イヤモウ、とんだめに逢うたやつよ、

ト此内奥より富三郎文を持て來て、

一富三　彌助どん、さつきから待て居たわいなア、小万さんがいはしやんすには、此文を見て、大儀ながら、内へ行て來て貰ひ度といはしやんしたぞえ、

ト文を渡す、

一龍藏　ソリヤア御世話て厶りやした、○此文を見て内へ行て來て呉ろとは、あの子に色がましい事は無し、何だしらん、

ト合點の行かぬながら文を開き、

今夜は歸る程になんとなと取繕ろうて貰うて下さんせや、

きつと〳〵、たのむぞえ、○彌助どのへ小万、又何んぞ、

あの子の癇癪に、さはつたかしらん、

ト文をふところへ入れて、

おちよどん、私や一寸内へ行て來る程に、此通りを小万さんへ頼みますぞえ、

富三郎　そんなら歸つてムんすか、そりや大儀ぢやの、

龍蔵　なんの爰から仲うら迄いくらあるものだ、どりや一ト走り、

ト向ふへ走りはひる、始終をどり三味せん、

富三郎　ドレわしも、小万さんに此様子を、

料理番　おちよどん、モウお吸物が出るによ、

富三郎　合點ぢやわいなア、

ト富三郎は奥、料理番は下座へ這入る、矢張をどり三味せんにて、奥より善次、勘右衛門、角太郎、時蔵四人して、のしほ菊之丞を連れて出る、

四人　兩人共に一寸來やれ〳〵、

菊　お前さん方がわたしに用と仰しやるは、先度からおこのさんがいはしやんす三五兵衛さんの事かえ、

のしほ　小万さん、彼方方迄いろ〳〵とおつしやる事ぢや程に、どうぞ能い様に返事して、お呉いなア、

菊　サアおまへがだん〳〵云うてぢやけれど、どうも成ぬ譯があるゆゑ、

善次　どうもならぬ譯といふは、小万外に色があるといふのか、

勘右衛門　仲町で聞合した所が、そちに計は深間は無い、今時の藝者に似合はぬ甚だ堅い物ぢやと、聞およんで居るわさ、

角太郎　われ〳〵三五兵衛どのに、頼まれた手まへ、

時蔵　小万是非とも、

一のしほ　アレあの通りぢやわいなア、尾花や梅元で聞いてお出なされたゆゑ、うそもつかれず、お前の返事が無によつて、どうやら、わたしが捨て置く樣で、すまぬわいなア、外にどう云ふ譯が有るかは知らぬけれど、それはそれ、

ト菊之丞思入あつて、

一菊　サア此事は、どんな事があつても、云ふまいとは思うたけれど、云はねば三五兵衛さんへ、お前さん方や、おこのさんが濟ぬ口振、それぢやによつて、いひます程に、必ずぱッとならぬ樣にして下さんせえ、

一のしほ　そりやモウ私が呑込でゐやんす、そしてお前のいろさんの

一四人　名はなんといふえ、

一菊　はやう聞して呉をれやい、

一四人　サアその御方は、

一菊　その御方は、

一四人　千嶋のおやしき、さつま源五兵衛さんでムんすわいなア、

ヤア、、

ト顔見合せおどろく、

一菊　常住お前さん方と一座しても、見付られぬ樣にするは、大抵しんきなものぢやムんせぬわいなア、

一善次　何れも、御聞なされたか、千嶋家の御家老さつま源五兵衛どの〳〵御子息、われ〳〵が、毛虫どの、

勘右衛門　日頃より四角四面な源五兵衛どの、斯樣な遊所なぞへまゐるやうな仁ではないが、おろかしい千太郎さまへ、世の中のせわを御覽に入れんため、遊所へをり〳〵の鬱散、

角太郎　左樣でムる、ちんぷんかんで、われ〳〵へも意見めさるゝ源五兵衛どのが、

時藏　藝者の小万といろ事とは、

菊　その偏屈な、堅くるしい、生正面な御方が、○思案の外とは、おかしいものぢやわいなア、

トはづかしきこなし、四人顏を見合せて、

四人　ハテどんな事な、

ト奥より雄次郎出て、

雄次郎　モシ〳〵、あなた方が御見えなさらぬとて、千太郎樣がお尋ね遊してゞムりまする、サア〳〵、ちやつと御出なされませいなア、

善次　千太郎殿が御召とムれば、參らずは成ますまい、

勘右衛門　此樣子を三五兵衛どのへ、

角太郎　そりや間を見合せての事に致さう、

時藏　サア〳〵、まづお出なされい、

ト相方になり、四人奥へ這入る、のしほ菊之丞が側へより、

のしほ　小万さん、なんぼお前が誠らしう云はしやんしても、どうもわたしや合點が行かぬ、源五兵衛さんはお屋敷でも、物堅い御方との噂、こちの内へ御出なされても、ついに女子

をとらへて、一寸のてんがうも仰しやらぬ、其上あなたの奥様といふは、お國の御血筋、きつとしたお家がら、まだ御祝言はなけれど、それさへお嫌ひなさるもの、なんぼお前が隠さんしても、源五兵衛さんと譯のある事なら、素振目遣ひ、滿更わたしぢやと云うて、ちつとは氣取らぬ事は無わいなア、三五兵衛さんの返事に困つて、ツイ云はしやんしたのであらうがな、何のわたしに隠す事は無いわなア、おこのさん、仲町と洲崎と所は隔てゝあれど、お前の親切いつぞやからお屋敷樣で内方へ來るわたし、なじみの無ものを、可愛がつて下さんすお前に、何ンの隠しませうぞいなア、御推量の通り三五兵衛さんが、しつこう云はしやん

菊一

して、口説かしやんすがいやさに、返事に困つて今の樣に源五兵衛さんと、譯が有と云うたのぢやわいなア、

菊一　さうでムんせう、おまへ源五兵衛さんに、その事を頼んでかえ、

菊一　ほんにさうでムんすな、そんなら源五兵衛さんに此樣子を咄して來うかいなア、ト行かうとする、

菊一　ア、これいなア、立ながら咄しも成まい、殊に座敷に御出なさるを、お前が呼では目に立つ、○コレおとわ手前一寸源五兵衛さんを呼びまして、おぢやいのう、

雄次郎　アイ〳〵私がそんなら、ト行かうとする、

菊一　コレ〳〵おとわどん、マア今の事は何にも云はずに置て下

さんせえ、

雄次郎 小万さん、なんぼ洲崎が塲末でも升屋のおとわでムんす、

そんな事は呑込で居るわいなア、

トこぶしになり、雄次郎奥へ這入る、のしほ菊之丞しかゞある、奥にて、

宗十郎 何芝から使とは何用ぢやしらぬ、

トいひ〳〵出て來る、

一 おこの、芝から身に會たいと申して參つた使者はどれにをるぞ、

トのしほ、菊之丞うち〳〵して言乘る、

宗十郎 ハテその使はどれに居るぞ、

のしほ 一 ハイ、芝からの御使は、

宗十郎 一 どれに居るぞ、

のしほ 一 ハイ御使でムりまするわいなア、

宗十郎 一 何を云ふぞいやい○これは小万先程から座敷に居らぬが、

何をして居るぞ、千太郎樣を初め、三五兵衛殿もお尋ねなされた、早く奥へゆきやれ、

菊 一 ハイ參じは參じますが、おこのさん、今のをな、

のしほ 一 サア今のをな、ト菊之丞に言へと云ふこなし、

宗十郎 一 ハテ何ぢややら、兩方から今のをな、○とは何の義ぢや、

菊 一 サア今のをなト申まするは、へ、、、、、、

ト笑ふ、宗十郎合點の行かぬ思入にて、のしほを見る、是も笑ふ、

宗十郎 一 是れはマアなんの事ぢや、

のしほ　サア是れは、オ、それ〳〵芝からの御使でムりまする、
宗十郎　サア其御使に早う會たい、どれに居るぞ、
のしほ　サアその御使は、
宗十郎　その使は、
のしほ　爰にでムりまする、　ト宗十郎が方へ菊之丞を推しやる、
菊　おこのさん、何ぢやぞいなア、　トうち〳〵こなし、
宗十郎　何ぢややら、どぎ〳〵と、エ、コリヤ身共を嘲弄するのぢやな、能い機嫌な者共ぢや、
　ト苦笑ひする、兩人もぢ〳〵こなし、のしほ菊之丞に今のを賴めと仕方、菊之丞はお前云うて呉いといふ仕方、兩人宜敷あつて、思はず宗十郎と顔を見合せて、
のしほ　ホ、、、、

菊　ホ、、、、、
兩人　ホ、、、、、　ト氣の毒さうに笑ふ、
宗十郎　何の事ぢや、さして可笑くもない義を○エ、芝の使は玄關に待つて居るか、どれ、
　ト奥へ行かうとするを、のしほ宗十郎が袖をひかへ、
のしほ　ア、モシ○其御使の口上は、小万さんが聞いてゞムります、コレイなア、爰へ來て、今の口上を、とつくりといはしやんせいなア、　ト菊之丞を宗十郎の側へ突き遣る、
宗十郎　小万が其口上を承つて居るか、何の用ぢや、早うその口上を、
　ト菊之丞思入あつて宗十郎の側へより、

菊一　其口上はなアそれ、○頼まれてお呉れなされませ、
宗十郎　其口上は頼まれてお呉れなさりませ、そりや何の事だ、
菊一　その譯はマア、下に居て、聞いてお呉れなさんせいなア、

ト相方になり、よろしくあつて、

奥に來てムんすあの三五兵衛さんが、何ぢややらわたしに惚たの何の、というて口説しやんすけれど、どう云う事やら、わたしや三五兵衛さんが嫌ひで〳〵ならぬわいなア、それで今迄斷云うても、爰にムんすおこのさんや、奥にムんす伴さんや、左十さん迄頼んで、のつ引ならぬ今宵のせつぱ、得心せぬは、外に深い色でもあるやうに問詰られ、せん方無さ、如何にも深う譯の有るお方といふは、源五兵

衛さんでムんすと申ましたわいなア、　トこなし、

一わたしも側に居る所で、左十さんや伴さんへ、あなたと譯のあるといふ返事、はつと思うて後でさけば、三五兵衛さんを初め皆さんも、常からあなたをこはがつてムるに依て、源五兵衛さんと譯があるというたら、此後三五兵衛さんも、云出してゞはあるまいと思うて云うたあの子の氣轉、御迷惑なはあなたお一人、

菊一　常から物堅いあなた、此樣なじだらくな事は、お否であらうけれど、三五兵衛さんがお國へ御歸りなさるゝ迄、表向計りの色事になつて、わたしが難義を救うてお呉れなさりませ、其かはりにいやらしい事はしは致ませぬ、モウシ源

五大力

五兵衛さま、一生の御恩に着ます程に、皆さんの手前は今お頼み申たやうに、譯のある躰に見せて下さりませ、モシお頼み申ますわいなア、

宗十郎思入あつて、

宗十郎　芝の使はハテ變つた口上ぢやなア○小万は云うても藝者の事なれば、後先のわきまへなく、只今の樣な義を云出さう共、おこの迄が同じ樣に、やくたいもない事を云出すは、なんぼ表向でも内むきても身共は大切なる御用を蒙り、江戸表へ下り居る身分、殊に箇樣なむくつけな侍が、若輩な女をとらへ、惚れたの、イヤ色ぢやのとは、○餘り馬鹿〳〵しい、

ト宗十郎思入あつて、

宗十郎　ソレ見やしやんせ、大方斯うで有うと思うたわいなア、小万さん、お前どうせうと思はしやんすえ、

菊　どうせうと云うたら、頼みに思うた源五兵衛さんは、おいやぢやと云うてゞムんす、詰らぬ者になつたわいなア、

宗十郎　詰らいでも、詰つても、

菊　どうも仕樣が無もの、

宗十郎　無ではすまぬわいなア、

ト宗十郎を見る、宗十郎は向ふを見て居る、

菊　トうぢ〳〵する、宗十郎は宗十郎へ指さしして、頼めと云ふ仕方をして見せる、

宗十郎　濟ぬわいなア、

トいろ〳〵氣をもむ、菊之丞こなしあつて、

菊一　わたしが身の切なさに、源五兵衛さんの御身に心も付ず、ひよんな事を云出して、嘸御腹が立ませうが、そこをどうぞかんにんして、今云うた樣に、表向の所は、マア色ぢやと云うてさへお呉れなさると、よいのでムりまする程に、藝者ひとり助けると思うて、モシ○是れぢやわいなア、

ト泣かむ、

宗十郎　是れは又迷惑千万な、

ト二人こなしあつて、

藝者といふは僞り誠は敵討でムる、助太刀致して呉いと云樣な事なら、二言は無けれど○色ぢやとは、どうもはや、

ト菊之丞がなりを見て、

菊一　餘り鹿馬〳〵しい、サアさうてはムりませうけれど、頼まれてお呉なさりませぬと、どうも今宵座敷に居られ升せぬわいなア、

一のしほ　ほんに最前の樣に皆さんに云しやんした事が、うそぢやと知れたら、三五兵衛さんが猶きいてゞは有まい、

菊一のしほ　それぢやに依て此樣におしつけて御頼、常もの云はぬあの子が、此樣に頼ましやんす事、

菊一　どうぞ聞いれて、

二人一　お呉なさりませいなア、

・　宗十郎思入あつて、

宗十郎一　ム、、すりや今宵の所が拔られぬから、どう有ても推付て

菊　の頼か、

一のしほ　アイ、あなたより外に、

一宗十郎　此釘はさゝませぬ、

一　是は亦迷惑千万〇能いわ、兩人が頼み何うなりと致して遣はさう、

菊　エ、そんなら頼まれてお呉なさるかえ、

一のしほ　得心して上なさるかえ、

一宗十郎　如何にも頼まれて遣はさうが、表向計りぢやぞ、

一菊　アイ三五兵衛さんの手前を譯の有ぶんにさへ云うておくれなさんすと宜いわいなア、

一宗十郎　サアそれで能事なら、どうなりと云うて遣はさう、

一菊　そんなら、愈々さうぢやぞえ〇ア、嬉しや、おこのさん、とんと痞がおりたわいなア、

一のしほ　わたしが心迄さつぱりとした、最前源五兵衛さんが、いやぢやと仰しやつた時は、コリヤマアどうしようと、たいてい案じた事ぢや無いわいなア、

一菊　さいのう、わたしもひよんな事いひ出して、後へも先へもいかなんだによつて、いつそ驅落せうと思うたわいなア、

一宗十郎　ハ……客に口説れ返事に困り驅落せうとは、しどのない所が、流石は藝者のはてハ……、イヤ小万其方が頼を聞て遣すからは、又身共が頼む事も聞て貰はねばならぬが、合點か、

菊一　そりやモウ何でも聞に依て、必ず今のを頼むぞえ、

宗十郎一　サア〳〵可いてや〳〵、

ト奥にて、

仁左衛門一　おこのや〳〵、おこのは何に居る、

ト云ひ〳〵出て來る、三人思入あつて、宜敷座を改める、仁左衛門のしぼを見て、

おこの是に居るか、最前から尋ねて居つた○源五兵衛どのも是にムるか、○ホウ小万も是に居つたか、

菊一　アイ、

ト宗十郎が方へ思入、

宗十郎一　イヤ三五兵衛どの、御存じの通り拙者一水も喫ませぬ、千太郎さまがお好の泡盛強付られて甚だ酩酊、漸く醉を醒さうと存じて、失禮のだん御めん下されい、

仁左衛門一　なる程御酒をまゐらぬ御手前、あわもりは御難義でムらう、然らば是れにて御休息なされい、千太郎樣の御前は身が宜しう取計ひませう、

宗十郎一　それは恭なうぞんじ升る、

ト こなし、菊之丞立て行うとする、

仁左衛門一　ア、小万待て、其方は何れへまゐる、

菊一　アイ御座敷が淋しからうと思うて、

仁左衛門一　ハテ座敷には藝者共があまた居れば宜わさ、マア〳〵爰で一寸咄しやれな、

菊一　源五兵衛さん、爰に居ても大事無いかえ、

仁左衛門一　ハテ源五兵衛どのが、お身が是に居つたとて、なんの大事かあらう、マア〳〵下に居やれ、

のしほ一　小万さん、三五兵衛さんが、彼の樣に仰しやつてぢや程に、マア下に居りいなア、ト菊之丞をむりに下に置き

もうし三五兵衛さん、わたしを御尋なされ升たは何の御用でムりますえ、

仁左衛門一　なる程そちを尋たは、ト菊之丞を見て、又宗十郎が方を見て、

イヤさして急な用でもない、トこなし、

宗十郎一　おこのをお尋なされたは、エ、扨はお馴染とやらの御用向かな、

仁左衛門一　是れはまた、源五兵衛殿には御酒機嫌の印、ついにない洒落を遣つしやろな、ハ、、、時に源五兵衛殿、手前そこ許、大切なる御用につき、當所の屋敷へ參り、方々の遊所〳〵へ立寄り升も、アノ大切なる一品を、ト云はうとする、

宗十郎邊を紛らし取合はぬ故、仁左衛門あつくなり、

サアかの大切にいたす千太郎樣、われ〳〵が守護致し、當所の御逗留、下世話でいふ智惠つけのため、拙者を乳母のやうに思召てムるは、きのどくなものでムる、

宗十郎一　生得穩和なお生れつき、ふだん御側にムる貴殿、御心配の程推察仕つてムる、

仁左衛門一　是れは〳〵御挨拶、それに付升ては、遊所へ御出の砌りは、

宗十郎　みめよき女を御覽なさるゝと、○こまつたものでムる、
一　イヤ〳〵、賢愚ともに、色情は、はかられぬものと承る、
仁左衛門　ハア然らば、そこ許のやうな、四角四面な、偏屈な仁でも、
一　色は捨られぬものでムるかな、
宗十郎　捨られてよいものでムるか、堅いと申すは、

刀を見て、

此手前、拙者迚も同じ人間、貴殿ぢやと申しても、まんざらお嫌ひでもムるまい、
仁左衛門　イヤモウさういはれては、一言もない、誠に大好物でムる
一　わいのう、　ト扇子を顔へあてゝこなし、
宗十郎　さう見える〳〵、時に其大好物の馴染があらうが、拙者に

仁左衛門　はなぜお隠しなさるゝな、
一　イヤモ隠すではムらぬが、かやうでムる、舊冬迄はなじみの女郎もムたれど、只今ではちと外に、

ト菊之丞を見て思入あつて、

イヤ外にぞんじよりの女がムて、彼の馴染の女郎も何時しか遠ざかり升た、
宗十郎　ハテそれは御執心な義でムるな、
一　仁左衛門　時に其執心な女めに、手をかへ品をかへ、だん〳〵と云寄り升れど、今に於て得心致さぬ、根のつよい女め故、拙者もほとんどこまりいつて居るで、
宗十郎　シテその女めは、やはり遊女の類でムるか、サアそれをい
一

仁左衛門　はつしやれ〳〵、
一　さう問はれてはどうか云にくいやうなれど、てんぽの皮いうてのけうか、必ずわらはつしやるな、〇身共が執心の女と申すは、
宗十郎　女といふは、
一　仁左衛門　これに居る、
宗十郎　これに居る、
一　仁左衛門　小万ばうでムる、

ト顔をかくしてこなし、菊之丞ひんとしてあちらむく、のしほ宗十郎思入あつて、

宗十郎　ハ、ア扨は貴殿が御執心といふは、小万でムるか、〇イヨ

一　仁左衛門　〳〵ほれられ手様々、
おだてさつしやるな、〇所でかの女は、はて意地の強いやつ、さま〳〵と云寄り升ても、今に於て返事をいたさぬて、
宗十郎　そりやそのはずでムる、彼めは屹度致した情夫がムる、貴殿には御存じないか、
一　仁左衛門　イヤ彼が事は當所深川は勿論、吉原迄も、篤と聞合せ升たが、色がましいものは一人もないと承はる、
宗十郎　サアそこが大きな御了簡違といふもの、深川がムるゆゑ、
一　所詮貴公のお心には〇ナア小万、

ト菊之丞へこなし、仁左衛門せいたるいきにて、

五大力

仁左衛門　そりや聞事でムる、シテ其深間と申すは、何奴でムるぞ、
御ぞんじならば、お聞せなされい、
ト宗十郎が方へにじりより屹となる、
宗十郎　なる程、さやう御意あれば御咄し申さう、小万めが深間と
いふは、
仁左衛門　深間と云ふは、
宗十郎　めんぼくないが、○身共でムる、
仁左衛門　エ、、トびつくりするこなし、宗十郎扇子で顔をかくす、
菊之丞うれしきこなし、
仁左衛門　何といはつしやる、小万が深間といふは、源五兵衛殿そこ
許か、

宗十郎　餘人へ必ず御沙汰御無用、　仁左衛門こなしあつて、
仁左衛門　ハ、、、、コリヤ嘘だ〳〵、嘘〳〵、手前が小万に執心だと
開いて、いやがらさうと思うて、嬲らしやるのか、嘘だ〳〵、
菊　イ、エ嘘ぢやムんせぬ、源五兵衛さんとは、迅から譯があ
るけれど、誰にも知らさぬ忍び逢、おまへがいろ〳〵とい
うておくれるを、すげなう返事したは、斯ういふ譯が有故、
仁左衛門　三五兵衛さん、必ず腹立て下さんすなえ、
宗十郎　ム、、然らばいよ〳〵小万が、
宗十郎　疑はしくば、證據を御目にかけう、サア小万斯う顯はれてか
らは苦しうない、爰へ、
菊　そんなら往ても大事ないかえ、

宗十郎
一三五兵衛どのはすねぢや、大事ない〳〵、

ト菊之丞宗十郎が側へ來て、べつたりともたれかゝつてすわる、仁左衛門これを見てむつとするこなし、

一のしほ是はマアあんまり思ひがけないによつて、最前から御挨拶も申ませなんだ、小万さん、マアいつの間に出來た事ぢやぞいなア、

一菊おこのさん、是れまてお前に隱したのは、三五兵衛さんを初めおやしきは皆内かたへおいでるによつて、それでかくした程に、かんにんしておくれえ、○三五兵衛さんもそのかはりに、お慮外ながらわたしが、屹度よいのをお世話してあげる程に、今迄の事はとんと川へ流しておくれえ、

一宗十郎ハテそれはいふに及ばぬ事、さやうな事を根葉にもつ三五兵衛どのではない、○ナニ爰な通人め、只今小万が申通、いづれなり共、餘の藝者を、とも〳〵御世話いたすから、小万の事はさつぱりと思ひ切て遣はされたが、よさゝうなものゝやうに、トいうて居るうちから、

仁左衛門一やかましい、だまらつしやい〳〵、エ、いま〳〵しい、最前からべらり〳〵と、はつち坊主が米をこぼした樣に、やかましいわえ、身ふせうながら國元よりおさしづを請、大切な詮議に參つた身共、そこ許のやうに、賣女藝者に魂を奪はれるやうな侍ぢやと思うて身共を馬鹿におしやるな、

ト不興なる躰、三人顔を見合せ、宗十郎氣をかへ、こなし有つて、

宗十郎　三五兵衛どの御めん下されい、拙者餘程たべ酔升て、何を中したやらとんとぞんぜぬ、此上は御めんを蒙つて酔覺しといたしたい、サア小万、いつもの樣にかいはう頼む、

ト いひ〳〵菊之丞が手をとり、奥へ行かうとする、仁左衛門こなしあつて、菊之丞が裾を引とめ、

仁左衛門　源五兵衛、小万、スリヤ兩人は、　ト思入、此時奥にて、

唄「あれむしさへも、つがひ離れぬあげ羽の蝶、

ト うたふ、宗十郎こなしあつて、

宗十郎　つがひはなれぬわれ〳〵ふたり、○三五兵衛どの後刻、

ト 歌になり、宗十郎菊之丞手を引合ひ奥へ這入る、後に仁左衛門奥を見て口をしきこなし、のしほと顔を見合せ、ちやつとたばこを吸付る、のしほ思入あると、奥より善次、時藏、勘左衛門、角太郎つか〳〵と出て、

善、時、勘、角　三五兵衛どの、

仁左衛門　何れも、　ト 奥を見て思入、のしほは手をもぢ〳〵手もちなく、

のしほ　なんと皆さん、お聞被成升たか、小万とした事が、何のかくさいでもよい事をかくして、あなたがたにも御腹を○サア御腹はおたて被成まいけれど、わたし迚も大抵わるい事ぢやムり升ぬ、イヤ斯うなさらぬかえ、小万さんへのつら當に、仲町でどれぞよい藝者さんを色にして、アヽどれがよからうぞ、オヽそれ〳〵仲町の事は、おちよや、おとわが能う知つて居り升る、ドレ奥へ往て尋て參りませう、誰樣がよからうなア、

ト 紛らし、こなしあつて奥へ這入る、始終相方、仁左衛門たばこのみながら、

仁左衛門　いづれも御聞の通り、めんぼく次第もムらぬ、
善次　三五兵衛どの、コリヤ御思案被成ずばなり升まい、
仁左衛門　思案というて外にはない、身共を今迄馬鹿にした女め、其
一　うへ今の如くこれ見よがしに兩人が有樣、此返禮は手前が
一　むねに、
勘左衛門　シテ其御思案は、
仁左　生得愚かしい千太郎樣、何事も身が詞次第、アノ馬鹿者を
一　たらしこみ、源五兵衛めに耻辱をあたへ、小万めがほえづ
一　らをたつた今見せ升う、
角太郎　なる程貴殿の御詞次第で、如何樣共なる馬鹿殿の千太郎樣、
一　玉に遣ふは、あつばれの御思案、

仁左衛門　しかしながら一筋ではゆかぬ源五兵衛、まさかの時は是、
一　トさゝやく、是より段々順に呼く、
四人　心得ました、　ト思入ある、此時龍藏花道より文を持て戻て來る、
一龍　どうぞ座敷のぐあひがよければよいが、○おとわどん、お
一　ちよどん、　ト奥を見て呼ぶ、
角太　ヤイ〳〵、仲居共を呼ぶわれは何者だ、
一龍　私は仲町のさくら屋のものでござり升る、
一時　さくら屋と申は、たしか小万が内で有うな、
一龜　ハイ左樣でムり升る、　仁左衛門文を取れとこなし、
一善　見れば文を持て居るが、何用あつて參つた、
一龍　ハイ此文は、小万さんに、急用があつて參り升た、

勘左衛門　フウ小万に届けるのか、

龍　左様でムり升る、

勘左衛門　然らば身共が今座敷へ参るから、小万に届けて遣はさう、

龍　それは餘りおはゞかりでムり升る、

勘左衛門　大事ない〳〵、

龍　さやうなら憚りさまながら御頼申上升る、

ト文を勘左衛門に渡す、勘左衛門すぐに仁左衛門が側へ持て行、仁左衛門直に上封を見て封を切る、龍蔵びつくりして、

龍　ア、もうし〳〵おまへさん方が御らうじては、　ト寄るを、

四人　やかましい、さがらぬか〳〵、

龍　それでもおまへさん、

四人　慮外ひろ〳〵とぶちはなすぞ、

ト思入、龍蔵しかたなくこは〴〵つぶやいて居る、

仁左衛門　急ぎ申入候、われら事今夜は殊外氣分悪敷候間、おこの様へ斷申し、座敷の首尾あしからぬやうにして、此文屆次第早く御歸り待入参らせ候かしく、小万どのへ母方、〇なんと何れも御聞被成たか、

四人　いかさまあやしい狀でムり升る、

仁左衛門　母親が病氣というて、ちつともはやう歸らうといふ小万めがこしらへ狀、大がい知れた事だ、ヤイ此狀は偽りで有うがな、小万が客といふは此三五兵衛だ、母親が病氣であらうが、そこねようが、今宵中は歸す事はならない、さう思

龍一　うてうしアがれ、そりやおまへさん、御無理と申ものてムり升る、なんぼお客が大事でも、親の病氣をかまはずに、座敷がつとめて居られませうか、其様におつしやらずと、どうぞ今夜の所は、

仁左衛門　ならぬ、爰な糠味噌野郎めが、

トきつといふ、龍藏ハイとこはがる、

善一　うぬは大分小万が贔負をひろぐな、エ、聞えた、小万と源五兵衛が中を世話やいて居るな、それゆゑ四の五のと申のでムらう、いつそぶち放して、

ト刀に手をかける、龍藏とびのき、

龍一　ア、もうし〳〵、そりやアなんの事てムり升る、最前から承はれば、源五兵衛さまと小万さんとの中を世話やくのなんのと、とんと合點が參りませぬ、

仁左衛門　あのマアしら〴〵しいつらを御らうじろ○エ、顔に似合はぬふといやつだ、小万と源五兵衛が中を知らぬといふ事はない筈、いつからの事で何所で出合ふ、ありやうにぬかし居ろう、

善一　ぬかしやうが遲いと、うぬ痛いめにあはせるぞよ、

皆々　それがいやなら、きり〳〵ぬかせ、　トきめつける、

此内龍藏始終ふる〴〵して居る、

龍一　ア、モシ〳〵、其やうに口々におつしやつて下さい升な、

なんぼ膽玉のふとい私でも、コウお侍さまに取まかれ升ては、ぶる〳〵ものでムり升る、其樣におつしやらずと、私が申事を聞ておくれなさりませ、

善一　ぬかす事があるなら、爰へ來てさり〳〵ぬかせ、

皆々一　早く爰へうせろ、　ト龍藏氣味惡きこなしにて、

龍一　さうお侍さまが立はだかつて御出なされては、

ト こはゞくまん中へ來てすわり、

一　譯と申は外でも厶り升ぬ、アノ小万さんは評判の石部金吉、是迄方々の御客が、いろ〳〵とおつしやつても、其方は大きらひでムり升る、源五兵衛さまは元より、あの子にころぶなぞといふ嫌味な事は厶り升ぬ、どういふ事で源五兵衛

さまと、譯のあるやうにおつしやり升るな、

仁左衛門一　譯の有るといふは、小万と源五兵衛が口から、かやう〳〵でムると、たつた今ぬかしたわ、

龍一　エ、、そんなら小万さんと源五兵衛樣とが、こりやアとんだ事だ、　トあきれる、

勘左衛門一　然らば其方は實正知らぬか、

龍一　藝者の色事を廻しの私にかくすとは、　ト小判のなりをして見せ、レコをはなれまいと思つて、テモあたじけない源五兵衛樣、こりやアよつ程まうけそこなつたわえ、

ト仁左衛門龍藏が樣子をつくづくと見て、

仁左衛門一　彌助とやら心底見えた、一つ呑め〳〵、　ト丼鉢を出す、

龍　ハイ、そりやアありがたうムり升る、

仁左衛門　伴右、一つついで遣はされ〳〵、

龍藏すてぜりふにて井をとりあげる、勘左衛門一つ〳〵ぐ、龍藏こなしあつて一つのむ、

仁左衛門　ソレとつておけ、　ト紙入より小判を出し、紙に包みなげてやる、

龍　此お金は、

仁左衛衛　小万を取持つ骨折ちん、

龍　さやうなら、あなたも小万さんに、

仁左衛門　ぞつこん惚て惚抜いて居る、此三五兵衛、是までさま〳〵と云寄ても、取合ぬこそ道理、くさりあうて居る兩人、どうも身共武士がたゝぬ、小万を身共に取持たば、まだ其上に如何程でも、金子はそちが望み次第、　ト龍藏思入、

龍　ようムり升る、源五兵衛さまを切れさせて、小万さんを取持ませう、

仁左衛門　われその言葉にちがひはないか、

龍　廻し冥利下駄をさげぬ法もあれ、

四人　しかと取持つな、

龍　深川の廻し仲間でも、小口もきく彌助、鹽屋ぢやアないが、頼れたら一寸でも後へはよらぬ、親船にのつたと思つて御任なされませ、

仁左衛門　ハテ小氣味のよいやつだな、

ト奥にて鳴物入りの所作の切れになる、

一龍　アレ奥はさわぎの太皷三味せん、我等も又此御金で何所ぞへ出かけひとさわぎ、三五兵衛様、　ト最前のぶみを引破り、

一仁左衛門　是で今夜の工面はぐわらりつと、

一龍　是からある事ない事、見る目かぐ鼻の此彌助、

一仁左衛門　身共は奥へ參り、彼の馬鹿人形を、そろ〳〵と遣ひかけませうか、

一善　誠に三五兵衛どの〻からくり、

一三人　水銀の仕かけ様、

一仁左衛門　細工は流々、さらば仕上げをお目にかけうか、

ト をどり地にて、仁左衛門をどりながら奥へはひる、是についてみな〳〵

奥へはひる、

一龍　思ひがけない此御金、　トいたゞいて、○是で先づ合羽の身請をして、どりや假宅の嚊アにあつてこようか、

トやはり踊三味せんにて、向ふへはひる、ちよん〳〵にて此道具ぶんまはす、

本舞臺上の方障子家躰、向ふ一面の襖、上の方刀懸に刀大分かけてあり、すべて大座敷の模様、爰に春五郎、仁左衛門、廣次、粂三郎、三代蔵居て、手々に酒盛の躰、下の方に善次、勘左衛門、時蔵、角太郎、富三郎、雄次郎を相手に酒盛、方〳〵に燭臺あまたともし、廣五郎、龜松、源之助、くるは名よせの唄にあはせ踊ををどり居る、

皆々　イヨ〳〵出來升た〳〵、　ト口々にほめる、

一廣次　中々三人とも、よい若衆ぢや、名はなんといふぞ、

一源之助　ハイ澤吉と申升る、

龜松　私は龜吉と申升る、
廣五郎　私は鶴治と申升る、
三代　皆男藝者さんぢやわいなア、
仁左衛門　大分あぢをやつた、イヤ千太郎樣、彼等に御褒美の御詞を遣はされませう、
春五　オ、遣はさう、〈、イヤ若衆共、爰へこい〈、
三人　ハイ〈、　ト三人すゞに春五郎が側へ來る、
春五　今の褒美におれが國產を遣はさう、
三人　私共は、御國產などはぞんじ升せぬわいなア、
　トこちらへ來る、
春五　こちの國の名物を知らぬとは、わいらはさつい馬太郎ぢや

女皆々　な、
春五　オホ、、、、ほんにさつい馬太郎さんぢやわいなア、
　身共は千太郎、あいらは馬太郎、ハ、、、こりやよいわいなア、
善　イヤ時に、先程から源五兵衛殿がムらぬが、何れへ參られたな、
仁左衛門　誠に源五兵衛には、何をして居らるゝ〇ハッ千太郎樣申上升、源五兵衛が居り升せぬ、これへ呼びせまうかな、
春五　ほんに最前から見えぬ、これへ呼べ〈、
仁左衛門　ハッ〈〇源五兵衛殿は、何れにお居やる、千太郎さまのおめし、何れも、

皆々　源五兵衛どの〳〵、　トロ々に呼立る、下座の方の障子の内より、
宗十郎　ハツ〳〵、　トいひながら出て下の方にひかへる、
仁左衛門　貴殿にはどれへ御出なされた、千太郎樣の御待兼でムる、
宗十郎　イヤ失禮ながら暫く睡眠、眞平御免下されませう、シテ御用はな、
春五　其用は身は知らぬ、コリヤ覺えぬか、
宗十郎が出た襖より菊之丞出て來て、そこら見廻し、よき所へちやツとすわる、皆〳〵是を見て、
皆々　見つけたぞ〳〵、小万そちやいづくへ參つた、
仁左衛門　小万、わりやどれへいて居つた、有樣にいへ、
菊　わしやどつこへも參りは致しませぬわいなア、

仁左衛門　千太郎樣、有やうに申させませうな、
春五　ヲ、申させい、ヤイ小万、わりや何所へ這入て居つた、有やうにいへ、いはぬと泡盛でいはすぞよ、
角　泡盛とはようムりませう、サアこれでのめ〳〵、
ト大きなるこつぶを菊之丞が前へ置く、菊之丞むつとしてこつぶをとりあげ、
菊　おとわどん一つ掛いでおくれ、
ト雄次郎酌をする、菊之丞飲まうとする、宗十郎とめて、
宗十郎　まて〳〵最うよい○イヤ何いづれも、小万がお座敷をあけましたは斯うでムる、拙者暫く睡眠の間、かいはう頼みまするゆゑ、御座敷の事をかき、申譯もないしぎ、彼女が

善一　不調法は拙者にめんじられ、何卒御用捨を、

ア、すりや、小万が詫言は、そこ許がさつしやるか、ハテ

勘左衛門一　かはつたとこから、御あいさつでムるな、

皆々一　源五兵衛どの、御深切な義でムるな、

宗十郎一　ハ、、、、、　トロ〳〵にやかましくわらふ、宗十郎是にかまはず、

コレサ小万、千太郎様おの〳〵方の御機嫌直し、わつさり

と一つ飲め、

菊一　アイそれなら此盃で思ひざしにせうわいな、

トちひさい盃を取上げる、

勘雄次一　思ひざしとはよからう、おとわ一つつげ〳〵、

アイ〳〵、　ト酌をする、菊之丞酒をのむ内に、

四人　思ひざしとは、何所へゆかうぞ、

トロ々にいふ、菊之丞のみしまひ、

菊一　出石宅左衛門さん、御慮外ながら、　敵役ト皆々顔を見合せて、

善一　出石宅左衛門どのへ、小万が思ひざしとは、

皆々一　よう〳〵、宅左衛門さまめ〳〵、

廣次一　廣次最前よりかたすみへよつて居て、此時、

これは〳〵、何れもおほめの御詞有がたうムる、拙者先程

より餘り盃がすはらぬゆゑ、たばこ許のんで居つた、小

万のおもひざし、さらば一つ給うか、

トいひ〳〵にじり出て盃をとりあげる、

富三一　どれ、わたしがお酌いたしませう、　トこちらにて酒盛になる、

仁左衛門　なんと千太郎様、あれに居り升る小まん、あなた様に、少々心の有やうな體にムるが、御前にはなんと、

巻五　何をうそらしい、トこなし、

仁左衛門　イヤ〳〵誠にムり升る、何は差置、是へ呼ませうかな、

巻五　來るなら呼んで見い、

仁左衛門　ハア○小万おめしなさるゝ、これへ參れ、

ト菊之丞きかぬかほにて、宗十郎廣次と酒盛のてい、すべて大座敷にて、兩方へわかれて居るもやうなり、

四人　小万はやくこれへ來やれ〳〵、

トやかましういふ、菊之丞思入有て、

菊　オヽぎやうさんな、いま參り升わいなア、爰にも盃がも

宗十郎　つれて有る、もちつと待つておくれ、

宗十郎　是はどうしたものぢや、たとひいかやうとも、千太郎様のお召しとあれば、はやう往て、御機嫌に入るやうにしやれ、

菊　そんなら往ても大事ないかえ、

宗十郎　大事ない〳〵、

菊　お前のゆるしなら、ドレゆかうわいなア、

トたつてこちらへ來る、

四人　イヨ〳〵源五兵衛どのゝいふ事をさいて樣々、トおだてる、

菊　オヽおかし、いつそおだてゝぢや、久米吉さん、淺香さん、お前がたも爰へおいていなア、

ト仁左衛門と春五郎があひだへすわる、

仁左衛門　イヤ千太郎様、此小万が儀、いかゞ取はからひ升うな○ハアしからばそのとほり申付升う○何小まん、是においでなさるゝ千太郎様、いつぞやより其方を甚だの御しふしん、御大身に身をまかすは、そちたちが果報といふもの、ありがたいとおもうてお請を申したがよい、なんとお心にかなひませうがな、

春五　オ、協うた〳〵、マアちよつと爰へ來い、

菊一　ア、もうし私は彼方へ參りますわいなア、

春五　三五兵衛、ねつから來ぬぞよ、

仁左衛門　サアようムり升、しばらくおひかへ下さり升う○小万、イヤサ藝者ではない、かりそめながら我〳〵が御主人、千太郎さまが御心を御懸なされたその方、なぜお請を申さぬぞ、

菊一　御大身で有うがお大名で有うが、人といふものは心いきばかりなもので御ざり升、おろかしい千太郎様をたらしこみ、お前はマアさむらい、

トいはうとする、宗十郎たばこのんで居て、せきばらひしてまぎらかす、

イヤさもしい藝者のわたしに、御大身様はつり合はぬわいなア、　ト立てこちらへ來る、仁左衛門こなしあつて、

仁左衛門　スリヤいよ〳〵千太郎様のお心には、したがはぬか、

ト わがいふ通りをいへと春五郎へおもひ入、

春五　スリヤいよ〳〵千太郎様のお心には、したがはぬのか、

トいうて、仁左衛門が方を見る、菊之丞やはりだまつて居る、

仁左衛門　しぶとい女め、　ト春五郎へして見せる、

一春五　しぶとい女め、○ねつからものいはぬな、なんぼものいはいでも、身請して國へつれ歸り、われと一所に、隱居樣とはどうであらう、

四人　小万ありがたいか、どうだ〳〵、　トいふ時、宗十郎にじり出て、

一宗十郎　イヤ〳〵、はゞかりながら小万儀は、たとひ身請を被成ても、御心にはしたがひ升まい、

一善　ムウ、千太郎樣が身請被成ても、お心にしたがはぬとは、

三人　源五兵衛どの、シテそのやうすは、

一宗十郎　イヤほかてもござらぬ、小万は拙者が相方でムり升、

一皆々　ヤア、、

一宗十郎　それゆゑ身請は御無用と、お留め申まして厶り升る、

一春五　イヤそんなら小万は、そちがいろか、がをれ、

ト あきれる、仁左衛門こなし有つて、

一仁左衛門　源五兵衛ひかへめされ、おろかしうても千太郎樣は御主人の片われ、その御主人のまへをもはゞからず、小万はお身が相方といふからは、

一宗十郎　こんりんならく、いづく迄も、　ト菊之丞が手を持て引寄る、

一仁左衛門　御覽なされましたか、ハテほてくろしい儀では厶り升ぬか、

一春五　ハテほてくろしい儀で厶り升ぬか、

一善　御主人をふみつけ、法外せんばん、

角一　千太郎様がお心をかけられし小万を、横取した源五兵衛、
勘左一　家來の身をかへり見す、是れ見よがしに、
時一　いはうやうもない、につくいやつ、　ト皆々立かゝる、
春五一　につくいだんか、小万を横取した源五兵衛、皆寄てたゝい
てやれ〳〵、
仁左衛門一　何れも千太郎様の御意ぢや、ぶちのめさつしやれい〳〵、
四人一　ハア○御意ぢや、〳〵、〳〵、

ト宗十郎を皆々扇にてさん〴〵に打擲する、宗十郎じつとこらへて居る、

菊一　菊之丞取付き、
源五兵衛さん、おもひがけない此様子、斯うならうとは露
知らず、よしない事をお頼み申して、

ト いはうとする、菊之丞を引のけて、

宗十郎一　コリヤなんにも云ふな、云譯するもかうならぬ先の事、一
たん武士がたのまれてからは、是でも非でも、たてとほす
が千島家の國風ぢやはやい、
菊一　ちやというてみす〳〵、　ト宗十郎ひつとつて、
宗十郎一　サアみす〳〵しれた二人が中を、御存ない千太郎様の御腹
立は御尤、それぢやによつて、　ト菊之丞をつきはなす、
菊一　エ、　ト身をふるはして宗十郎を見て、　堪忍して下さんせ〳〵、

ト宗十郎をにがむこなし、

仁左衛門一　ハ、、何といづれも色男といふものは、女のかはゆがる物
てムる、

四人
一仁左衛門　さやうでござる、　仁左衛門、宗十郎が側へより、
源五兵衛、女めゆゑに打擲され、ほんまうてあろ、小万
そちもうれしからうなア、○千太郎様と云ひ、殊に大切な
役目を蒙むりながら、遊所の女に魂を奪はれたる源五兵
衛、お國への聞え、しばらく遠慮仰付られずばなり升まい。
一巻五　さうぢや〳〵、ヤイ源五兵衛、大事の用向を蒙むりながら、
さん〳〵の身持、國への遠慮、身が目通りは叶はぬぞ、
一菊　そんなら源五兵衛さんは、
一仁左衛門　御前はかなはぬ、　トきつといふ、
菊之丞心いきあつて、仁左衛門が側へゆかうとする、宗十郎引廻しとめる、
菊之丞宗十郎を見てなきおとす、

一仁左衛門　さいぜんよりよしない事て座敷の不興、千太郎様にはお座
敷を替られ、又改めて御酒に致ませう、
一巻五　それもよからう、是から奥へ往て、藝者共には三味せんこ
さう、我等は揚弓とでかけう、
一皆々　これは一興でムり升る、
一巻五　サアみな來い、
一仁左衛門　何事によらず御前の御意を申繼ぐ此三五兵衛、迚もの事に
是も御意ぢや、〳〵、
ト扇にて宗十郎をたゝく、菊之丞宗十郎思入、仁左衛門じろりと見て、
一仁左衛門　ハ、、、　唄になる、此一件のこらず奥へはひる、相方になり、宗十郎菊
之丞殘る、皆々這入る、障子やたいより、のしほ出て、二人が側へ來て、

思入有て、菊之丞が袂をひかへ、

一のしほ　最前よりの樣子は、皆聞いたわいなア、小万さん、お氣の毒なものになつたなア、さうしてマア、此仕舞はどうしようと思うてぢやへ、　ト宗十郎へ思入有る、

宗十郎　ハテよいわい、かやうな難儀にならば頼まれまい、又難儀にならずば頼まれようと云ふやうな、二筋なたのまれやうはせぬ、小万何にもきな〳〵思ふ事はない、御前を遠ざけられたというて、さしたる仕落でもない、また御機嫌のなほる事も有うわいい、

一菊　わたしに案じさせまいとて、其やうな事をおつしやつてくださんしても、三五兵衛づらが御側に居る内は、　ト思入、

一のしほ　さうでござんす、源五兵衛さんの御難儀も、元の發りは三五兵衛さんが、お前を口説しやんしたを、得心さしやんせぬゆゑとは、みす〳〵知れて有ながら、さうともいはれぬ最前の仕儀、

と此内菊之丞思入あつて、あたりの枕を取て來て、刀掛の宗十郎が刀を抜き、指をきる、兩人びつくりして、

宗十郎　これは何事をいたした、

一のしほ　いたみはせぬかいなア、　ト介抱する、

一菊　いゝえ大事ないわいなア、

トこなし有て、指を取り紙に包み、宗十郎が前におく、

五大力

これを取て下さんせ、

宗十郎　ヤ、

菊　賤しいわたしがたのんだ事、いやとも云はず聞いてくださ
　んした其うへに、おやしきの住居さへ、かなはぬやうにし
　た元のおこりは、あさはかなわたしから、今更なんと御禮
　の云ひやうがなさに、眞實ほれたといふ、心のちかひでムん

宗十郎　ト宗十郎思入有て、

ム、最前たのんだは僞りなれども、其禮の云樣がなさに、
　指まで切つて、

菊　アイ、お國にはれつきとした、お嫁子さんのある事は聽て
　居れど、此江戸においてなさんす內は、せめてわたしを女
　房に○イヤ女房はすぎるによつて、飯焚ともおぼしめして

　どうぞお側に置て、エもし、　ト思入のしほこなしあつて、

のしほ　小万さん、けうといものぢやわいなア、云合せの色事を、
　底心からの惚やう、さすがは名取藝者さんほどあつて、達
　引が格別ぢや、よく惚さしやんした、指は愚か、腕も切て
　あげいなア、

宗十郎　ア、是々おこの、其樣に側からそやしたてるな、身共が承
　知ぢややら、承知でないやら、知れもせぬに、小指一本て
　さへ迷惑致し居るに、腕を貰うて、なんとするものぢや、

菊　そんならわたしがお氣に入ませぬかえ、○お氣に入ぬは初
　めから知れてはあれど、外にお禮の云樣が無さに、切角切
　つた指も仇事、ぢやと云うて、わたしゆゑにそのお身にさ

せまして、此まゝではどうも、○得心して下さんせねば、

宗十郎　いつそ、　ト宗十郎が刀に手を掛るよろしくとめて、

一　まて小万、それでお主の心底見えた、源五兵衛承知いたした、

のしほ　小万さん、あれ承知ぢやとおつしやつてぢやわいなア、

一菊　そんならほんまに、承知してお呉なさんすかえ、

ト宗十郎、菊之丞が手を取る、

宗十郎　親が満足に産付た五躰の指、それを不足さしての、そちが

一　禮○承知した、　ト指を頂いて懐中する、

のしほ　小万さん見やしやんせ、指を頂いて承知ぢやといなア、

一菊　源五兵衛さん何にもいはぬ、エ、忝なうムんす、

一のしほ　源五兵衛さん、思惑ない今日の首尾、委しい噺は、アノ小

座敷て、

宗十郎　それには及ばぬ事ぢや、

一のしほ　及ばぬては、小万さんの氣が濟ぬわいなア、サア〳〵ちや

つとおいでなさんせいなア、

ト宗十郎をむりにたゝせる、宗十郎もつけな顔にて立あがり、

宗十郎　そんならゆかうか、

一のしほ　サアおいでなされませ、　ト突遣る、宗十郎思入あつて、

宗十郎　今迄は主人もち、今宵からは浪人の源五兵衛、ア、まゝよ、

一　ト唄になる、のしほ宗十郎を障子やたいの内へつきやり、しやんと障子を

しめ、後を眺め、こなし有て奥へは這入る、始終相方むかうより東蔵、中

間の形りにて、狀箱持て來て、

東一　お旦那、三五兵衛さまは何れにこざるやら、三五兵衛樣、

お旦那お旦那、と呼ぶ奥より、

仁左衛門一　幸平あわたゞしい、何事ぢや、

東一　イヤお國元より、只今火急のお飛脚が參り、則ち此狀箱源五兵衛樣とお旦那へ、御連名の御狀でムり升、

ト狀箱を差出す、仁左衛門狀を出し見て、

仁左衛門一　コリヤ國元の家老勝間源次兵衛より、身共と源五兵衛とへム、、ト狀箱をひらき狀を出して讀む、

コリヤ是主人千島の冠者樣にも、當夏富士の御狩の御供を仰付られたとある、其に付先達て紛失いたした御家の重寶

龍虎の呼子、一刻も早く、詮義仕出し源五兵衛と身共に歸國せよとある源次兵衛の書狀○こりや幸ひ源五兵衛におよばぬ、たとひ此狀到來せずとも此方より源五兵衛が身の上委しう認めた源次兵衛への此狀、ト懷中より出して奥にて篤と認め置たれば是を返事と飛脚にわたせ國元の源次兵衛へ早速屆けさせよ、ト右の狀を箱へ入れて渡す、

東一　すりや此御狀をお返事と申、御國許の源次兵衛樣へ、

仁左衛門一　いかにしつかりと渡せ、そして、ト呵く障子家たいの内にて、

菊一　もうし源五兵衛さん、なぜに其樣に、すげなうさしやんすぞいなア、ト是を聞て仁左衛門、障子のかたを伺ふ、

東一　もうし御旦那コレもうし、ト大聲にて呼ぶ、

仁左衛門一　これ、ト思入り、これをきつかけに、柏子幕、

大和町貸座敷住の場

一 出石宅左衛門　大谷廣治
一 家主六右衛門　大谷德治
一 非人猪の堀の三　大谷候兵衛
一 同　ちやん助　坂田時藏
一 廻し彌助　嵐　龍藏
一 醫者小まん　瀨川菊之丞
一 薩摩源五兵衛　澤村宗十郎

本舞臺三間ともに、おつとほし平舞臺、見付鼠壁、押入唐紙、納戸口、下の方に引窓の紐下げて有り、門口すゑ物、是にさげ板にして、へんくつも耶書物讀んで居る、側に刀掛に二腰かけて有り、門口に候兵衛、物貰、裸身によごれたる白張を着、女形の張子かつら、鈴を持ち踊て居る、時藏やぶれ大鼓を打て居る、此見え宜しく、口唄にて幕明く、

時藏　てん〳〵天滿の神子の振袖、鈴を袂にひいかへた、

トいひ〳〵大鼓をたゝいて居る、

候兵衛　ひかへたるこそ、やさしふり袖、鈴をひかへてはやした、

ト是よりやかましく、云うて居る、此内向より德次家主の形りにて、日光膳に色々とりのせて、布巾を懸け、是を持つて出て來る、

德次　ヤイ〳〵、わいらは爰を何所だと思つて、其樣に踊て居るぞ、とほれ〳〵、

五大力

一時藏　ヤイ聞いたか、内から何ともいはぬに、表からとほれとは、こいつは新らしいぢやアないか、

一候兵衛　表からとほれといへば、さしづめ内へとほらにやアならない、サアこい〳〵、

ト兩人内へはひらうとする、

一德　ヤイ〳〵待をれ、内へ這入ても、貸座敷の事なれば何もない、こりや見ろ、飯まで此様に持運ぶは、米は元より錢といつちやア、かけたちやんころもない、役にたゝぬ所に長居せうより、はやく行け〳〵、

一時　旦那、そんなら多葉粉でも、二三ぶく下さいませ、

一德　こいつらは、様々にねだりかけるぞ、こりやヤイ一躰わいらは目が明いてゐるか、居ないか、此門口にある書付が見

えぬか、ト さげ板を見せ、

一時　へんくつもの、物貰ひ、借錢乞堅く無用と、しかも假名まじりに書いてあるぞよ、是がわいらが目には見えぬか、見えても見えいでも、こつちやア貰さへすりやア、よいぢやアないか、

一德　サアそつちは貰さへすりやアよいで有うが、こつちはやらねばよいのぢや、何となりと、しやべれ〳〵、

一候　何だいま〳〵しい、錢にもならぬ所で、てん〳〵天滿の神子のふりてん、

一時　あつたら所で破太皷をたゝかうより、てん〳〵天滿の神主振袖、ト兩人をどりまはつて、向ふへ這入、德次後を見送り、

五大力

一德　神主どのも、おひねりがあがらないで、おこり舞うてゆかれた○イヤ内にムり升るか、　ト戸を明る、

一宗十郎　誰ぢや、

一德　誰というたら、丸屋の六右衛門、家主でムる、

一宗十郎　是は〳〵お家主様、よう御出下されたな、　ト起かへる、

一德　イヤ〳〵矢張其儘、私への御遠慮は御無用、

トいひ〳〵、宗十郎が側へすわる、

一宗十郎　只今表で、何やらかしましく申てをつたが、何事でムり升る、

一德　イヤ何事でもムらぬが、今門口で物貰と下拙、少々いどみ合ひ升たのでムり升る、

一宗十郎　シテ物貰は歸り升たかな、

一德　鶴の一聲、歸れというたら、逃げて歸升た、

一宗十郎　最前から門口で、かしましう申してをつたれど、いつも貴公の御出下さる時分、今に歸して下されうと存じ、打捨置升た、

一德　ハテぶしやうなお人ぢや、けりやう手前がよい時分にきたればこそ、モシ用でも有て來ずば、どうさつしやり升、

一宗十郎　イヤもう貴公が御出下されずば、其儘に捨置、日が暮うが初夜にならうが、打捨て置升ると、どこぞでは歸り升る、

一德　ハテ悠長な事をいふお人ぢや、あいつらは物貰も有り、又中には、そこらに有ものを、ちよいとやらかす奴があれば、

氣を付さつしやるがよい、

宗十郎　イヤ〳〵何を取て參らうが苦しうムらぬ、拙者が物と申しては爰にムる大小、そちらに有る明挾箱計り、炬燵ぶとんは貴公のお世話て、借用申した貸物屋の蒲團、其外は丸行燈、火打箱、たばこ盆、これぢやと申して、みな其許のもの、取られても、手まへ何ともぞんぜぬ、

徳一　徳次呆れたるこなしにて、横手を打ち、

はて扨へつらひのない、さつぱりとしたものゝいひやう、其氣性を見込んで居る此六右衞門も、さすがは此深川大和町の住人、たれムらう、

宗十郎　一　ハヽヽ、座興は格別、誠にふと致した御縁で、其許のお世話になり、二月ごしに三十日餘り、家賃と申し、殊に朝夕まで、かやうに自身御運び下さるゝ御深切、御禮の申しやうもムらぬ、身ふせうながら、千島の家中にて、さつま源五兵衞、兩手をついて此通り當座の御禮、首尾よく歸參も致さば、唯今の御恩は屹度謝し升う、千萬忝ならぞんじ升る、　トきつと手をつく、徳次迷惑さうにして、

徳一　マヽ、御手を上げられ升う○是は改つた御禮、痛み入升る、あひ緣さえんとやら、こなさまの事といへば、伜が事より大切に存じ升る、此上は二月は愚か三月四月、ないし一年でも二年でも、ゆつくりと落付てムり升せ、又座敷代をやらねばならぬなどゝ、苦にせぬがようムる、一文半錢

とらいでもよい、モシどこぞ漏なら直して遣ませうぞえ、
其内にも御歸參の有やうに、およばずながら所の氏神八幡
宗十郎　樣、堀の内の祖師さまへも、御願をかけ升た、
一德　それは忝なうぞんじ升る、
彼是いふ内、なんぼ春の日でも暮前、夜食も大方あるまい
と、おもつて持て來升た、コレ澤庵も今日口をあけたが、
よいあんばいだから、持て來升た、
ト澤あんを、三本樅にからげ、出して見せる、
宗十郎　イヤ〳〵まだほしうムらぬ、後刻たべ升う、膳部は其儘片
一德　よせて置て下さりませ、
ハテ後は後の事、とき時分に物をくはぬと、からだの毒で

ムる、一膳まゐりませ、ト いひ〳〵そこらを見廻し、
南無三、大和風呂に火が消えたさうな、どびんは何所にムる
宗十郎　な、
どびんは茶がぬるうならうと存じて、是へかけ置升た、
ト こたつぶとんを引明る、やぐらに紐にてつるしてある、
一德　炬燵とはよい思ひ付だ、わしもそれで今日は、芦久保を入
れてよこし升た、ト どびんをいぢつて見て、
どびんはひえきつて居るが、こりやアこたつにも火がムら
宗十郎　ぬの、
イヤ〳〵餘寒ははげしうても、最早如月逆上致してわる
うムるから、隨分火のないのもようムる、

五大力

一徳　てもぬるい茶では毒ぢや、そんなら汲替てしんぜ升う、しかし其あひだ、飯びつや香の物を爰に置いたら、鼠の餌じき、何所に置ませうな、

宗十郎　それは拙者がとり計ひ升う、此方へ遣はされ、

ト香の物を取り、引窓の紐を結びつけ、ぶらさげて置く、其内徳次、飯や膳を挾箱の内へ入れる、

一徳　かやう致して置けば、鼠の氣遣はムらぬぞ、なる程さう結び付て置いては、氣遣ひはムらぬ、是が彼のむすび〳〵と澤庵さうにハ、、、イヤ是はひやうひやく、引まどへ澤庵ゆうておくと、まづ第一盗人の用心に成升る、

宗十郎　ハテそれはなぜな、

一徳　ハテ盗人が、ひよつと引窓からはひらうとすると、下で澤あんわんとなき升る、ハ、、、どれ火をともしてしんぜませうか、

ト唄になり、徳次火打ばこをさがし出して火を打ち、あんどうへともす、むかふより廣次羽織袴の形りにて出て、門口へ來て、

一廣　チトたのみませう〳〵、

一徳　モウ日が暮れた、とほらつしやい〳〵、

一廣　イヤちとものが尋ねたうムる、此あたりに後の月から借宅致さるゝ、さつま源五兵衛殿と申す仁はムらぬかな、

ト宗十郎是を聞いて、

宗十郎　以前の傍輩どもでムらう、六右衛門どの御世話ながら、口

一德　上をとりつがしやつて下さりませ、

合點でムる〳〵、　ト門口へ來て、

一廣　源五兵衛宅は是でムるが、何所からムり升た、

然らば、手前儀は出石宅左衛門と申者てムる、源五兵衛どの御在宿でムらば、チト御意得たいと、云入れて下され、

一德　暫くお控へなされませ、　トこつちへ來て、

宗十郎　留守だといつて歸しませうか、

一德　イヤかの仁は、拙者ひごろから、入魂の傍輩どもでムる、くるしうムらぬ、御通し下されい、

一德　そんなら通し升う、

トいひ〳〵ふん込羽織をとり、しりをはしよる、宗十郎是を見て、

宗十郎　六右衛門どのぎやう〳〵しい、何をなさる、

一德　イヤ以前の傍輩衆が尋ねてムつたに、家來がないでも濟まぬ、そこでわしが假の可助と化るぢや、遠慮なしに可助〳〵と呼捨にさつしやるがよい、

宗十郎　ハ、、、、德次やつこのやうにして、門口をあけ、

一德　ネイ源五兵衛宿にをり升、是へ御通り下され升う、ネイネイ、

廣次　然らばゆるしめされ、　トは入る、宗十郎廣次を見て、

宗十郎　是は〳〵宅左衛門殿、

一廣次　源五兵衛どの、其後は打絶ましてムる、

宗十郎　まづ〳〵、　ト廣次しか〴〵あつて上の方へすわる、

扨々おなつかしうぞんずる、何からお咄申さうやら、誠に

廣次一　いつぞや、フト致した事で只今の此躰、面目次第もムらぬ、誠に其節は、手前も其席にをり合せながら、千太郎樣の御詞をかつて、三五兵衛がばうじやくぶじん、何と申さう言葉もないしぎ、それ故其儘打絶升てムる、其段は御免下されい、

宗十郎一　これは〳〵御挨拶　忝なうぞんじ升る、

ト此挨拶の内、廣次たばこをすひ付けようとして火のない思入、

徳一　おたばこ盆に火がない、可助なぜ火を入れぬ、

ネイ〳〵、

ト風呂を見てゐ火がないゆゑ、こまつたこなしにて、火打箱を出して、せはしく火をうつて、

廣次一　イザ召上りませう、

これは〳〵お召仕は、はなはだされい好と見え升る、

ト たばこを吸付る、此内徳次茶をくんで來る、

イヤかまはつしやるな、〳〵、

徳一　ネイ〳〵、

ト下へさがり、しやんと手を膝の上へのせて控へてゐる、

宗十郎一　シテ宅左衛門どのには、夜分お出下されたは、御用向でもムるかな、

廣次一　イヤさして用事と申すではムらぬが、先達てよりお屋敷へお立寄も叶はず、卅日餘りの御難儀、何か御不自由もムらうかとぞんじ、見つぎと申すではムらぬが、

五大力

トいひ〳〵紙入より包みし金子を取出し、

是に金子が一兩二分、しかも小粒で六つムる、これを用立升うから、御歸參の砌り御返濟下され、しかし申さぬ事はわるい、切米では請取升せぬ、やはり正金で御返しなされ、此金子を御渡申さうとぞんじ、一寸參つたのでムる、

ト右の金を宗十郎が前に置く、宗十郎思入あつて、

宗十郎　一　傍友の交りは筆墨の如くと申すに違はず、不所存な拙者を御見捨もなく、○忝ならぞんじ升る、しかし御氣遣下され升な、是に居らるゝは、則ち此大和町の住人、丸や六右衞門と申す、此仁の世話に相成、此座敷も自分のかけやしきでムるを、あらかじめ取つくろひ、當所の住居、鹽噌薪

に至る迄、段々の深切、言葉にはのべられぬしぎ、それゆゑ隨分心やすうくらしをり升る、

廣次　一　委細承はつて安堵仕つてムる、然らばそれに居らるゝが家主どのでムるか、

徳　一　さやうでムり升る、

廣次　一　サテ〳〵世には頼しい仁もあるものでムるな、拙者はまた其許のお召仕かとぞんじ、先程よりの不禮、御免下されい、

徳　一　是は〳〵痛み入升る、イヤモウ家主ではムれ共、折々には奴にもなり、飯焚にもなり、又ある時は、源五兵衞樣の按摩も致し升る、御求なされて、ずんと御徳用な家主でムり升る、

五大力

廣次　只今のやうす承はり、御不自由にはムるまいが、是は拙者が寸志、ひらに御川立られ下されい、

宗十郎　さやう仰下さるゝを、すげなう御返濟申すもいかゞ、

一廣次　御遠慮にはおよびませぬ、

一宗十郎　然らばざんじ借用申しませう、　ト金子を頂き、懐中して、かやうに貴公の御世話に相成升るも、何卒歸參の義を願をり升るが、今においてかの詮議の、

トいふを廣次德次へこなし、德次思ひ入あつて、

一德　イヤモウ侍のつき合は、さやう然れば、四角四面で、氣がはつて居にくい、土瓶を持て歸り、あつい茶を汲かへて參りませう、

一宗十郎　これは〳〵、かさねゝ〳〵御厄介に成り升る、

一德　イヤあなた、ゆるりとお咄しなされませ、源五兵衛樣、後程お目にかゝりませう、

唄になり、德次土びんをさげ、向ふへはひる、兩人しかゞゝある、むかふより菊之丞、袖頭巾、藝者の形りにて、出て來る、後より龍藏、まはしの形り、ばつちにて、しりをちよつと端折り、三味線箱と備前德利をさげて出て來る、

一龍　小万さん、毎ばん〳〵見る顏を、ちつとやそつと、遲いというて大事か、その樣にいそがずと、徐に歩いたがよいわいな、

一菊　彌助どん、何をいはしやんすやら、こちやせきはせぬけれど、こなさんがおそいのぢやわいなア、かんにんして下さ

んせや、

ト いひながら本舞臺へ來る、菊之丞内をのぞいて、龍藏にさゝやき、何つて居る、

廣次　シテ御せんぎの筋は、いまだ手懸りもムらぬか、

一宗十郎　イヤ其儀も少し心當りはムれ共、並々ならぬ詮議の品ゆゑ、甚だ以て心をいためをり升る、

廣次　それに付ても、此度殿樣狩場の御供、○アどうぞそれまで

一宗十郎　に、

一廣次　イヤ毛頭油斷は仕り升せぬ、　ト此内菊之丞表より伺つて居る、

まだ其上に、先達て貴殿と御言なづけムる御家門の御息女、なぎさどの、此度貴殿の儀をお聞及びあつて、甚だ御あん

じなさるゝ山、　ト菊之丞是を聞て腹立るこなし、

一宗十郎　右縁邊の儀は手前不承知でムる、と申す譯は、御家門の息女を妻女に申請ましては、源五兵衛は女房の蔭で、立身致した抔と被申ては、武士道が立升ぬ、それ故婚禮もなほざり、又右御用に付て當所へ參り升たのでムる、

ト菊之丞よし〳〵とうなづく、

一廣次　ぢやと申して御歸參の上は、早速御祝言めさるゝが、御親父樣への御孝行かとぞんじ升る、

一宗十郎　そりや歸參の上はいかやうとも、

ト菊之丞是を聞いて、腹立て這入らうとするを、

一龍　コレサ腹の立のは尤ぢやが、おまへが今這入ては、源五兵

五大力

一龍　衛様の爲にならぬ、な、爲に、それよりはあの毛才六を歸
一菊　した後で、存分いうたがようムりやす、
一龍　ほんにさうぢやな、したがどうしたら歸るぢやあらうな、
一菊　どうというたら、○オヽよい思案が有ぞ、幸ひ其頭巾で顔
一龍　をかくし、おまへは家主の婆になつて、家賃から米鹽薪ま
で、仕送りの催促がようムりやす、
一菊　めつさうな、ついぞそんな事をいうた事がないわいの、
一龍　そこは私がおまへの息子になつて、　ト さゝやく、
一菊　そんならむちやくちやで、いふ程によいやうに頼むぞえ、
一龍　そりやアのみこんでをりやす、マア帶を前へまはして、○
と腰をかゞめて這入るのぢやぞえ、

ト婆アのやうにして見せる、菊之丞笑ひながら、帶を前へまはし、身拵へ
する内、龍藏はとくりの置所にこまり、股ぐらへかくし、紐をくゝり付る
こなし、よき所にて、
一菊　ゆるさつしやりませや、源五兵衛様は内にムるかな、
一龍　ト いひつゝ、婆アのこなしにて入る、
なんでも今夜は、御目にかゝらにやア成ませぬぞ、
ト後より龍藏は這入、宗十郎二人を見てびつくりする、菊之丞やはり婆に
て、
一菊　イヤなんにもびつくりさつしやる事はないぞ、高で借錢乞
一龍　でムるわいなア、　ト宗十郎へのみこませるこなし、
オ、母ぢや人のいはるゝ通り、何もかも算用して貰はにや
なり升せぬぞ、

五花大力

一菊

オ、さうぢや、息子のちよち兵衛がいふとほり、爰へムん
してから、卅日餘りの座敷代○さうぢや有うが、
ト龍藏へいふこなし、龍藏「それ計ちやアないまだ米代もあると、日へ飯
をくふまれをして見せる、
オ、さうぢや、まゝ代、
トいひながら、また龍藏を見る、みそをするまれをして見せる、
むし代、ト龍藏まきをわるまれをしてみせる、
まさの代、さうしてまた、
ト龍藏を見る、醤油の仕方は出來ぬゆゑこまる、菊之丞もいふ事にこま
り、こなし有て、
左樣して又、あれ、それ、オ、左樣ぢや、二十四日二十五
日天神樣やくそく、八幡樣、初午のもの日、むちやくちや

にして貰うては、すまぬによつて、なんぢやあらうと今夜
中に、埒明けて下さんせにやなり升せぬぞ、
ト思入ある、廣次こなし有て、
廣次 イヤ源五兵衛殿、さいぜんの御家主は甚だの親切、それに
一 引かへ内方は、ハテきびしい催促の仕樣でムるの、
宗十郎 そりや其はずでムり升る、此内方は家付の後家御でムる、
そこでアレ少し腰もかゞんでムる、則ち後ろに居らるゝ御
子息といふも、此後家御の實子でムる所へ、六右衛門どの
がにじり込れ升たとの事、御らんの通り、六右衛門どのが
甚だけつかう仁なれど、内方は生れついての爪ながでムれ
ば、此やうに、度々の催促に、拙者もこまり入升る、

廣次　イヤモウ亭主のけつかうに女房のけはしいは、當世のはやりものでムる、ハテにが〳〵しい義でムる、

龍　イヤにが〳〵しからうが、あま〳〵しからうが、こな樣にはかまはぬ、親仁の結構仁にお袋の爪長が、こなさんの事で毎日〳〵夫婦喧嘩らんさわぎさ、

菊　こちのおやぢ殿のやうな事では、世帶が詰らぬによつて、さんじやした、

龍　なんでも今宵は、算用して貰ひませう、

宗十郎　なる程段々のしぎ、御尤もでムる、しかし手前も、少々工面いたしてをれば、

龍　エ、工面といふは無心でムるか、

菊　これいなア、無心なら當にせぬがようごんす、今時の客仁は惡洒落て、一向あてには成ぬわいなア、

トいふを、宗十郎龍藏いろ〳〵紛らす、菊之丞心付き、

龍　イヤ惡洒落な事いはずと、サア早う譯立て下さんせいなア、

宗十郎　折角親子づれで來たからは、算用して貰ひませう、源五兵衛どの、どうでムるな、

ト思ひ入ある、宗十郎こなし、廣次氣の毒なるこゝろにて、

廣次　先程から餘程の長座、拙者は最早お暇申ませう、

宗十郎　折角お越下されしに、よからぬ事をお聞せ申し、氣の毒千万に存じ升る、

廣次　何の、〳〵、只今の御自分ではあるべき事、

宗十郎　然らば、モウ御歸りでムるか、

廣次　近日又お尋申さう、　ト廣次表へ出る、皆々こなし、廣次花道の角にて、

家主の内方にしては、

ト菊之丞と顔を見合せる、菊之丞ちやつと姿のこなし、

お江戸は、はんくわの地とはいひながら、借金乞まで、はでなものぢやなア、

ト唄になり、廣次思入あつて、向ふへはひる、菊之丞是を知らずに、

菊　年寄れば腰が痛うてならぬわいなア、

龍　これ〳〵、モウようムりやす、

菊　イヤ借金乞ぢや〳〵、

宗十郎　ハテモウ歸つて仕まうた、

菊　エ、モウいんだかえ、

宗十郎　思ひがけない所へ小万、○おれをば、じゆつない目に合せた、

菊　オ、嬉しや、私も年寄の眞似で、しんどうてならぬわいなア、

龍　小万さんのせりふがならはぬので、はア〳〵思うて大汗をかき升た、

菊　それでもまんまと、だまして去したが、又戻つて來はせまいかいなア、

宗十郎　イヤ〳〵だまして去したと思ふは不覺、今歸りがけにいた一言では、まんざら覺らぬでもない、

五大力

龍一　さやうでムり升る、お江戸ははんくわの地とはいひながら
「ハテはでな借錢乞ぢやなアと、（廣次が）聲色を遣ひながら
歸り升たぞえ、

宗十郎　小万、おぬしやア宅左衞門を知つて居ながら、いかに顏を
かくせばとて、つか〳〵と這入てよいものか、たしなんだ
がよい、しかし今の婆は、大出來であつた、ハヽヽ、

龍一　そりやアさうと、肝腎のものを忘れて居り升た、どれ〳〵
持參の御酒を差上ませう、　ト いひ〳〵股ぐらより酒德利を出す、

宗十郎　彌助、そりやアなんぢや、

龍一　隅田川一升、われらが御見舞、　ト宗十郎とつて、

宗十郎　これは忝ない○こりや内から、かんをして來たのか、

龍一　イヽエひやてムり升る、

宗十郎　それに又此溫まりは、

龍一　ハア聞え升た、最前這入しなに隱し所にこまり私が○酒藏
に忍ばせて置升た、そんなら私がせいぶんのつよいので、
かんが出來たのでムりませう、

宗十郎　道理でおかしい歩きやうだと思うた、おぬしの持參でまづ
酒は出來たが、肴はどこから出ようぞ、

菊一　彌助どん、三味せん箱を出して下さんせ、

龍一　ハイ〳〵、　ト小座より三味線箱を出して、提げようとする、

菊一　これ其やうにすると、わるいわいなア、

龍一　オット、こりやアやまつた、　ト三味線箱を菊之丞が前へ持て來る、

一菊　御酒は彌助どん、御肴はわたしが進上ぢやわいなア、

ト盃をあげる、内へのべ紙を敷き、三味せんのうへに、大きなる鯛と蛸をのせてある、宗十郎見て、

一宗十郎　鯛のはま焼に、蛸のさくら煮、是はきびしいおもたせぢやな、

一菊　マア〳〵、こちらへ出さうかいなア、

ト鼻紙にて持そへ、蛸を提げ、こりやどうせうといふこなし、

一宗十郎　待たり、〳〵、蛸の置所は、　ト刀掛を見て引よせ、刀を卸して、

ソレ爰へひつかけたり、

一菊　アイ〳〵、　ト蛸を刀かけへ引かける、宗十郎鯛を取あげ、

一宗十郎　此鯛もどうせう、　ト是も置所にこまりし躰にて、

オ、あるぞ〳〵、小万其挾箱の内に膳があらう、持て來やれ、

一菊　アイ〳〵、　トはさみ箱よりぜんを出し、

一宗十郎　ほんに、こりやよいものがあるわいなア、

一龍　めしつぎをのけて、此鯛を斯う据るぢや、　ト鯛を置く、

モシ飯はどうぎにしこんでムり升るな、あなたは御酒はあがらず、此蛸でおまんまを上り升ぬか、

一宗十郎　イヤ〳〵さいぜん家主が持てわせられたれど、望みないゆゑ片付て置いたのぢや、

一菊　そんならおまへ、いつおまんまを上つたへ、

一宗十郎　今朝茶漬をたべた儘ぢや、

菊一　其様にむらじよくになさると、毒でムんすぞえ、ちつと計
てもあがれいなア、どれわたしが給仕して上うわいなア、
ト茶わんに飯を盛り、鯛をのせて膳をすゑる、

龍一　小万さんのおさふじ、こりや否でも、上らにや成升まい、
宗十郎一　然らば身共は御飯頂戴と仕らう○イヤ最前家主の持てわせ
られた香の物が、そこらに有う、小万取ておぢや、

龍一　イヤそりやア私が　ト立たうとする、

菊一　彌助どん、さうして置て下さんせ、爰へ來てこんな事する
のが、わしがたのしみぢやわいなア、

龍一　いかさま源五兵衛様の側で、世話女房のやうにするのが、
おまへの樂しみ、そんならわたしやア、かまはずに手酌で

菊一　そろ〳〵やりかけませう、
それがよいわいなア、
ト龍蔵筒茶碗で酒をのむ、菊之丞は香の物を方々と尋れ、思はず引慾にむすび付た香の物を顔へあて〻、びつくりして、

宗十郎一　オ、こは、　トとびのく、兩人もびつくりして、

菊一　何ぢや〳〵、

龍一　なんでムり升、びつくりしますわいな、

菊一　それでも、誰やら冷たい手で、私が顔を撫たわいなア、

龍一　何をマア、だれが冷たい手て顔をなでるものか、
トいひ〳〵方々見廻し、香の物を見つけ、

五大力　ハ、アよめた、モシ今の正躰、　ト香の物をぶらつかせ、

菊一　これでムり升るな、

宗十郎一　もうしありや何でムんすえ、

龍一　香の物ぢや、鼠のせいたうになんじふして、引まどの紐に

　くゝりつけて置いたのぢや、

　此香の物は、いかなる科にや、縄めのはぢにかゝりつらん、

　ハヽヽヽ、

ト香の物を卸す、菊之丞取て見て笑ふ、此内より徳次出て來て、片手に弓張灯燈、又片手には土瓶をさげ、内へ這入かゝり、此躰を見て門口に伺うて居る、龍蔵手酌にて引請ながら、

龍一　イヤモウ、斯うした所は、とんとお二人の宿ばひりを見るやうぢや、さらば祝うて私が、ト謡をうたはうとする、

徳次一　いづみは其儘、盡せぬ宿こそ目でたけれ、

ト唄ひながら内へ這入る、皆々見て、

菊一　もうしあなたは、

宗十郎一　是はお家主、

徳一　さいぜんから表へ來て居つて見たが、あんまり内でさわぐので、何事をやらかすかと思うて、立聞をして居たが、宿這入りの藝者そこで我等が祝儀の小謡、つきせぬ宿へ煮ばなの茶を持てきました、

菊一　ほんに見かけから氣の輕さうなお家主様、

龍一　おもたせの煮花で、家移茶漬は、どうでムり升る、

宗十郎一　ハヽヽ、こりやおもしろい、酒盛と宿這入り、

龍一　ごつちやになつた此ざしき、
菊一　しなものゝまじはり、
龍一　たのみある中の茶づけかな、　トうたふ、
皆々　ハ、、、、
德一　どれ〳〵我等もしやうばんせうか、　ト酒盛になる、
龍一　時に宵からよつぽどの間ぢや、私がかげが見えぬと、小万さんのお爲にわるいから、モウ歸りませうわい、
菊一　そんならさうして、又あすの朝いつもの樣に、駕籠をおこして下さんせや、
龍一　そりやア呑こんで居り升る、　ト菊之丞が袖を引き、　そつとてちらへつれて來て、宵から云はうと思うて居り升たが、折

菊一　がわるいから、ツイいひそゝくれて居りやした、今夜で身
龍一　印が、　ト指を五本見せる、
菊一　そりや二三日の内に、
龍一　サア、その二三日が、むちやつかうと思うてから、
宗十郎　トわざと宗十郎に聞えるやうに云ふ、
龍一　彌助、なんぢや、
宗十郎　イエこりやア、おまへさんのお聞きなさる事ぢやムり升せぬ、
龍一　一寸聞た所が、小万が身分さうな○爰にコレ金子が一兩二分ある、それてソレ能樣　ト投げて遣る、
菊一　イエモウそれては、　トきのどくなるこなし、

龍一　へ、、、とッともう、こんな事をあなたのお耳へ入ると、小万さんがたいてい氣のどくがつてぢやムり升せぬけれど、私も此間は、ふり廻しがッイ惡うて、ハ、、そんなら

宗十郎一　マア、これをお預かり申ませう、

龍一　しからばそれでよいか、

宗十郎一　よいだんか、よすぎ升る、イヤよいつひでに、仲人は宵のうち、

徳一　夜のふけぬ間にお暇申さう、

宗十郎一　左樣ならモウお歸りなされ升か、

菊一　彌助どん、たのんだぞえ、

龍一　よしさ、小万さん是から後で、

徳一　火の用心を、　ト菊之丞を見て思入、　さつしやい、

徳、龍一　ハ、、、　ト唄になり、徳次こなしあつて、つか〳〵先へ這入る、龍藏は花道へ一寸立どまり、

龍一　此金が一兩二分○是からこちらのもくろみが、○斯うと○兩方つかむがすがいまうけ、うまい〳〵、

ト唄になり、思入あつて向ふへ這入る、菊之丞宗十郎そこらを片づけ、

宗十郎一　イヤ小万、けふ遣つた文屆いたであらうな、

菊一　アイ、たとひ文はこいでも、毎晩來る事は知れてあるぢやムんせんかいなア、

宗十郎一　イヤあらたまつた事ながら、いつぞや不圖した事が縁となり、それから身共を如才もなう、大切に致しくれるそなた、

菊一　中々禮の云樣もないしぎ、過分なぞよ、

オ、おかし、おまへさんがいやがりなさるを、むりにこちらから、たのんで斯うなつた事、なんのおれいに及び升う、心のとどくだけは、ふじいうなめはさせまいと思うても、知て居なさる通り、ざしき一通りのわたし、客仁というては拵へねば、何やかや、しんきな事ばつかり、其上かへつて最前のやうに、おまへに心づかひをさせまして、いひ譯もない、○そしてマア呼によこしなんした、其用といふは、

宗十郎　客仁が、こしらへてもらひたい、

菊一　エ、、トこなし、

宗十郎　いやであらうが、サどうぞ客仁をこしらへてたもらぬかと

菊一　いふのぢや、

姫ごぜのをしへぐさは、ちひさい時にお師匠さんで聞いて、よう覺えて居り升る、なんぼいやしいつとめの身でも、此人より外に一生連添ふまいと、心に錠をおろしてからは、町の女中さんも、お屋敷の姫御ぜも同じ事、おまへさんより外に、身をばゆるすまいと思うて居るわたしに、客仁を拵へてくれいとはえ、

宗十郎　オ、がてんがゆくまい、其仔細といふは、源五兵衛が身に取ては、大切な事なれど、心底見ぬいた、そなたぢやによつて、

菊一　イ、エ聞して下さんすな、

宗十郎　や、

一菊　サアおまへの身に大切な事を、わたしが聞た其後て、何所からどうまはつて、其大切な事を、餘所外の人がいふまい物でもない、其時には、さすがは勤めの身ぢやと、私が口からもれたやうに、思うておくれなされはせまいけれど、どうも私が心がすまぬわいなア、

宗十郎　其誠を聞くからは、どうあつても、客仁が拵へてもらひたい、小万是非身が云ふ通りに、

一菊　わたしが心を見とゞけたうへ、どうあつてもとおつしやるには、ト思入あつて、能う〳〵ムり升る、如何にも客仁をこしらへませう、たとひどのやうに、いやと思ふ客でも、

宗十郎　心に從ふか、

一菊　イ、エ、、

宗十郎　ヤ、

一菊　サア身躰を任せるばかりが、客仁をこしらへるてもムんすまい、たとひ身をば任せいでも、勤のいつとく、口さき計りで、あの〳〵此の〳〵といひまぎらし、手くだといふは、お侍さんの、はかり事とやらぢやわいなア、

宗十郎　ム、おもしろい其手くだて、よもやしそんじはせまい、其客仁は外でもない、三五兵衛ぢや、

一菊　エ、、ト相方になり、宗十郎こなしあつて、

宗十郎　斯う計りては合點が行まい、一通り聞さや、身共と笹野三

五兵衛、此度江戸表へ下つたは、主人千島の家の重寶、大切なる龍虎の呼子、富士の御狩の御入用、いつぞやよりふんじつ、詮議のために同道、時にがてんのゆかぬは三五兵衛、國元にて其詮議の役目を、おして願ふ所存は、きやつがそこ意に、深きたくみあつてと親人のおほせ、それ故わざ〳〵下りし此源五兵衛、さりながら是ぞといふ證據もなきゆゑ、迂濶に詮議もならず、モシ荒立て詮議せば、却つて破却するか、○是では合點がゆくまいが、ひよつと其龍虎の呼子を打くだくか、又海川へしづめてしまへば、御家の大事、サ頼といふは爰の事、下地からほれて居るこそさいはひ、何卒三五兵衛が口からいはすか、何ぞ證據になるべき書いた物か、又は少しにても、そぶりはじりを聞出してたもれば、それを手づるに詮議仕出し、再び歸參、それ故客仁を拵へてたもらぬかといふのぢやわい、

菊一　ようういて下さんした、それ程の大事を打明けて下さんすおまへの心は、起請せいしを貰うたより、わしやうれしいわいなア、

宗十郎　しからば得心して、

菊一　アイがてんはいたが、意地づよい三五兵衛、ついした事では、

宗十郎　打明けぬ所を明さすが、そなたのはたらき、

菊一　源五兵衛さん、

宗十郎　ヤ、

菊一　わたしの心は、　ト獨吟になり、

「いつまで草のいつまでも、なまなかまみえ物思ふ、たとひせかれて程ふるとても、縁と時節のすゑを待つ、なんとせう、たがひのこゝろ打とけて、うはべはとかぬ五大りき、さはさりながら、かはるいろなき御風情、やがてあほぞえ、かたろぞえ、をしき筆とめ候かしく、

ト此唄の内、菊之丞思入有て、硯箱を引よせ三味せん箱より三味線を出し、裏皮へ五大力と書く、

菊一　是見て下さんせえ、　ト三味線を見せる、

宗十郎　ム、、すべて女の人手にわたす文の封じめに、ひらかすまいとしたゝめる五大力、

菊一　さいなア、お侍さんのたましひは刀、

宗十郎　町人の魂はそろばん秤、

菊一　藝者の魂は三味線、其三味線の封じめに堅う心のちかひ五大力、

宗十郎　外へ大事はもらさぬといふ、

菊一　アイおまへのたのみ、三五兵衛さんのひねの内、

宗十郎　首尾よう聞いた其うへで、

菊一　やがてあほぞえ、かたろぞえ、

宗十郎　マアそれまでは、しばしのうち、

菊一　わかれのやうに思はれて、

宗十郎ヤ、

菊一　をしき筆とめ候かしくぢやわいなア、

ト兩人こなしあろ、向ふより龍藏、駕籠を一挺つらせ、はしり來て門口をたゝき、

龍藏一　小万さん〳〵、

菊一　彌助どん何の用ぢやえ、

龍一　マア〳〵あけて下さいまし、

菊一　エ、けたゝましい、なんぢやぞいなア、

ト いひ〳〵門の戸をあける、龍藏内へ這入る、

龍一　何ぢや所ぢやムり升ぬ、さいぜんうちへいんだ所が、親方が呼付、今夜は小まんをぜひ共花やへやらにやアならぬ、

菊一　われがはたらきで、今宵の明けを貰うてこいといはれました、

龍一　それぢやというて今時分から、餘所へ行く事はいやぢや、

菊一　どうなりというて下さんせいなア、

龍一　そこにじよさいがあらうか、ちよぼくさやつても、いつかう聽かぬかなてこ親仁、其うへおまへが爰に居なさる事をけどつたやうす、モシ爰へ親方がくると、今度からの爲にならぬと思ふから、それで迎に參りやした、こん夜の所はわたしにめんじて、どうぞ戻つて下さいませ、

菊一　イエ〳〵、なんぼこなさんのいはしやんす事でも、今夜戻る事は、○コレをがむわいなア、

五大力

龍一　イヤこつちからをがみ升、おまへが歸りなさらにやア、中にたつたはしらで、めいわくな者は私一人り、こりやアマアどうしたらよからう、

宗十郎一　彌助があのやうにいふを、かたいぢにいふはわるからう、今宵の所は、マアかへつたがよからう、

龍一　いつぺん歸てさへおくんなさると、又今度の首尾はどうなりと致し升けれど、親方のかふけ（本のまゝ）には、さしもの彌助も降參でムり升る、

宗十郎一　主と病ひには、ぜひがない、歸つたがよい〳〵、

龍一　アレ旦那があのやうにおつしやつてゞムり升る、

菊一　そんならいなねばわるいかいなア、

宗十郎一　オヽサ、アレ彌助があのやうにじゆつながるぢやないか、

龍一　目立てはわるいと駕籠を持て參り升た、○サ駕籠の衆はやくたのみ升ぞや、

ト駕籠かき垂を上る、菊之丞はらたちながらふしやうぐ〳〵にかごに乘る、

菊一　モシ七ツ時分に來る程に、たゝかしておくれなさんすなえ、

宗十郎一　そりや合點して居る、彌助大義ぢや、

龍一　ハイ、〳〵、旦那モウ御休なされませ、

ト此内駕籠をかき上る、龍藏三味線箱をかつぎ、

菊一　モシほんに來る程に、ついおさて下さんせえ、

宗十郎一　オヽよいてや、

菊一　オヽしんき、

一龍　サア早うやつて貰はう、

ト唄になり、駕籠をいそぎ龍藏むかふへ這入る、宗十郎は、眞中の炬燵へこしをかけ、

宗十郎○一ハテ里の女にはまれなやつ、一大事をあかしたれば、心得ました仕おほせ升うと請合、其上三味線に五大力とちかひまでたつるとは、ハテきなやつぢやなア、

ト是をきつかけに道具廻る、

仲町葉奈家催の場

一藝者小万　瀬川菊之丞
一花屋女房おみき　佐野川市松
一仲居おさき　中村まんよ
一藝者おふさ　瀬川ふく吉
一同　はる吉　澤村槌之助
一薩摩源五兵衛　澤村宗十郎
一若黛八右衛門　坂東三津五郎
一奴　土手平　荻野東藏
一賤ヶ谷伴右衛門　中島勘左衛門
一花屋亭主伊三郎　中村傳九郎
一笹野三五兵衛　片岡仁左衛門
一出石宅左衛門　大谷廣次

本舞臺正面平舞臺、見附三間の長暖簾、上の方、好みの二階格子、下の方同二階、上下共小障子を立て、門口するもの、是に花屋としるしたる掛行燈、平舞臺に植之助、福吉、藝者にて三味線彈いて居て、三津五郎着附羽織、田舍侍の拵にて酒盛して居る、市松女房の形り、傳九郎亭主の拵にて、万代仲居にて酌をして、此模樣、さわぎ唄にて道具留る、

万代　サアく大盡さま、一つあがらぬかいなア、

市松　あなたは、モシさつう三味線が御氣に入升たなア、

三津五郎　いかにも、國元にはない女藝しや、お江戸へ參つたればこそ、おもしろう三味線ひきたてゝのたのしみ、

傳九郎　シテ旦那のお國は何所でムり升る、

市松　コレもうしあなたは九州千島の御家中ぢやわいなア、

傳九郎　ハアそんなら源五兵衛樣と一所のお國でムり升るな、

市松　サアそれて小万さんを御注文で今宵の約束ぢやわいの、

三津五郎　それく、かんじんの身共が望の小万はどうぢや、なぜお

市松　そい、晝から此樣に待て居るに、何と早う會して呉ぬ事か、

三津五郎　さいなア、小万さんに逢たいとおつしやる故、まはしの彌助を頼んで、今夜は是非此方へ見える樣に仕て置きました

万代　わいなア、

傳九郎　此深川の仲町でも、花やのおささん、めつたに違ひはムんせぬわいなア、

市松　モウおつゝけ小万さんも見えるでムり升う、それ迄先づ一つお上りなされませ、

三津五郎　イヤく、さう酒ばかり飲て居つては、いふ事がいはれぬ、

ふく、槌　小万さんにきついてりぢやなア、
三津五郎　こりか、つゞらか、知らぬが、何でも小万にあはうと最前から、○ア、、待るゝ共待身になるなとは、ア、よくいうた物ぢやなア、

ト さわぎうたになり、むかふより菊之丞を駕籠に乘せて、龍蔵三味線箱をもつて附て來る、

龍蔵　サア〳〵、モシ是非ならぬ小万さんを、此彌助が働きて、
市松　貰つて來ました、
龍蔵　それはかたじけない、彌助殿屹度恩に着る、お客樣も待かねてなれば、ちやつと小万さんを、
龍蔵　かつてんてムり升る、

ト 駕籠を内へ入れ、たれを上る、

菊之丞　おさきさん、やくそくは内方かいなア、

ト 云ひ〳〵駕籠より出る、市松立上り、

市松　アイ〳〵、おまへにちよつとなと逢たいというて、最前からまちかねてぢや程に、早う向へ、
菊　三五兵衛さんかと思うたら、さうでもないさうな、
ふく、槌　小万さん大和町かえ、
菊　大和やら、もろこしやら、とんとわからぬわいなア、
傳　イヤわかつてムり升る、いま日の出の小万樣の御來臨とは、
菊　忝じけない、もうし旦那、われらが女房のはかり事は、どうてムり升る、

三津一　イヤもう心をつくしたかひ有て、小万どの〳〵おいて、執着〳〵、サア〳〵是へ〳〵、

龍一　おさきどん、小万さんを貰うて來たかはりに、何ぞよいさかなでナア、

市一　酒どころか、しんぞさんでも、わたしがたてるわいなア、

龍一　そりや有がたい、そんなら臺所へいて、

傳一　われらと一所にサアやらう、

龍一　おまへの酒もひさしい物ぢや、ハ、、、

ト龍藏傳九郎奥へ這入る、三津五郎盃を取上げ、

三津一　まづはじめてなれば、小万こなたへお慮外申さう、

菊一　アイいたゞき申升う、

ト盃を取上げる、

三津五郎一　扨々聞いたよりはうつくしい、此仲町の櫻やの小万と、名にたつたもことわり、身共ははじめて逢うて此樣なうれしい事はない、ほんにそれ〳〵、

ト風呂敷をときて一つ〳〵出し、

是は粗末ながら上布、こちらは國府多葉粉、斯う近付に成印迄に、身共が土産ぢや、どうぞ貰うて下されうなら、千万忝ない、

菊一　是はマア思ひがけない、初てお目に懸りました私に、結構な此おみやげ、ありがたうムり升るが○マアあなたは、

三津一　千島の家中、

菊一　エ、、

三津一　イヤそなたに、チト折入てたのみたい事がある、

五大力

菊一　アノわたしに、
三津一　いかにも、
ト菊之丞こなしあつて、右の二品を三津五郎が前へおしもどし、
菊一　マア此御土産は御返し申升る、わたしは藝者、ちと譯があつて、たとひどなたでも、
三津一　イヤ〳〵、コレ身共が頼みたいといふは、全く色がましい義ではないぞや、
菊一　それでもどうやら、
三津一　ム、イヤ此家の花車、小万にチトみつ〳〵咄しもあれば、
市松一　皆をつれて暫く爰を、ハイ〳〵、合點でムり升る、おふささん、みなさん、

ふく、槌一　氣をとぼして、
市一　どりやおくへさんぜうか、
ト相方になり、市松先に立ち、ふく吉、槌之助、万代、奥へ這入る、あとに三津五郎、菊之丞殘る、三津五郎右の土産物を、又菊之丞が前へおき、
三津一　小万今もいふ通り、是はひつきやう身共が心ざしぢや、程に、是非その方へ、
菊一　義理をかけるはお客のつね、たかで藝者の私に、お侍さんのおたのみとは、
三津一　なる程尤も、ト思入有て、下の二階へむかひ、堤惣右衛門どの、御苦勞ながら、一寸是へ、
ト下の二階より東藏羽織野袴、とりての形にておりて來る、三津五郎東藏

を上座へすゝめる、菊之丞がてんのいかぬ思入、

菊一　もうしあなたはえ、

東蔵一　イヤ身共は千島の家中にて、堤物右衛門といふ者、此度御用につき、遙々と當所へ參つた、

菊一　なんの事やら、ほんにがてんがいかぬわいなア、

三津一　小万、合點がいかぬはず、身共は何を隱さう、其方が深ういひかはしゝ薩摩源五兵衛が眞實の兄でムるぞや、

菊一　ト聞いて、菊之丞びつくりして、

三津一　えゝそんなら、おまへさんが源五兵衛さんの、

サア兄の身共が、つひぞこぬ此茶屋へ來てそちに遇うて、折入て頼みたいといふは、あの通りお國の御役人、

菊一　エ、、

三津一　イヤ何物右衛門どの、今暫くあの二階へ、萬事の樣子、御けんもんの上、拙者が取計ひ仕る間、やはりあれへお越下されませう、

東一　然らば身共はあれにひかへ升う、朋友のよしみ、お手前のお頼ゆゑ暫時の猶豫、拙者迚も、惡かれとはぞんぜぬ、兎に角よろしう、

三津一　かたじけなう存じ升る、

東一　ト東藏思入あつて、繩さばきして、

菊一　ア此とり繩が役にたゝねばよいが、

三津一　エ、、ト思入れ、

サア、トかほを見合せ、思入あつて、

まづ〳〵、　ト相方になり、東蔵こなしあつて、元の二階へ上る、

三津五郎後見送り、菊之丞が側へ來て、

三津一　小万、あのお侍は國元のお役人、當所へお越は、弟の源五兵衛を召捕のため、

菊一　エ、、　トびつくりする、

三津一　小万、源五兵衛と縁切て貰ひたい、

菊一　エ、、　ト又びつくりする、

三津一　サア弟と、縁を切て貰はう、

菊一　エ、聞え升た、源五兵衛さんには、お國にいひなづけの、おむすめ子さんがあるによつて、

三津一　いかにも、いひなづけは、なぎさどのといつて、御家門の

菊一　息女、それと夫婦にせねば、弟源五兵衛が命がない、

三津一　そりやなんでいなア、

サア、此度弟が役目、首尾能仕おほせ、歸國すれば直に祝言、なぎさどのと夫婦になれば、源五兵衛が身の大慶、親兄弟も一家中への面目、殊に主命おもきおほせ、時に源五兵衛は此江戸表にて、深川の藝者、小万そちと言替して、大切な役目も粗略、あまつさへ、おろかしい千太郎樣の御機嫌迄そこなひ、身持はさん〳〵と國元へ相知れ、親人の腹立、手打にせんと老の一徹また、御主人方は不屆至極と、源五兵衛に繩かけて、國へ呼よせ、役目そりやくの仕おきと、アレ今の堤物右衛門どの、弟を召捕んと思ふ所へ、サ

アそこをいひなづけの縁あるなぎさ殿の取なしにて、段々親人をなだめ、殿様へのお願、どうぞ祝言したに、夫婦になりたいと、あまいおことば、源五兵衛身持あらためなば、科を免して歸國の上、夫婦にせんとの殿の御内意、所に源五兵衛はそなたといひかはしてをれば、所詮國へは歸るまい、さすれば是迄千島の御家にて、數代續さしさつまの家も退轉、其元はといへば、小万そちに源五兵衛が迷うてるゆゑ、親兄弟から世の人口、一家中の思はく、たとひ死んだ後でも、あほう馬鹿もの人でなしと、笑はれるが口をしい、そこをとつくり合點して、氏神よりはそなたがたのみ、どうぞ源五兵衛と縁切つて貰へば、弟が心も自然と直

り、國へ還り、なぎさどのと祝言すれば、死罪に遇ふ所か、

菊一　かへつて出世の御加増、サアそれぢやに依て、小まんそなたに、此兄がわけての頼み、

三津一　そんなら源五兵衛さんと、縁を切れとの事かいなア、○そりやどうよくぢやわいなア〳〵、

菊一　サアどうぞとくしんして、

三津一　源五兵衛さんといひかはしたは、まだ間はなけれど、大分譯のある事ぢやわいなア、

五大力　ハテ譯がなけりやいひかはされまい、そりや身共も、聞いても知れて居るが、小万いひかはした源兵兵衛が、そなたはよもやにくうはあるまいがの、

菊一　知れた事、にくうて人にほれられるものかいなア、
三津一　其かはいゝ源五兵衛ぢやに依て、身共が云ふ通り、縁を切つてたも、　ト菊之丞すつと立て奥へ行かうとするを引とめ、
待つた、小万、そちが源五兵衛と縁を切らねば、科人と成て國へ引渡される、又縁を切れば命たすかり出世する、其善惡はそちが心一つぢや、くどうはいはぬ、どちらへなりと返事が聞たい、
菊一　サア思ひまはせばまはす程、いつたんは切れねばならぬ譯なれど、
三津一　ソレ、それ程がてんがいてあるぢやないか、
菊一　ぢやというても、

三津一　ハテ、源五兵衛が身が納つた上では、ある縁なれば、手かけ、めかけになりと、
菊一　そんなら源五兵衛さんの身の納つた上では、
三津一　其時は又相談のしやうがあらう、これがほんの浮世の義理、情に思ひ切つてたもいの、
ト此内仁左衛門向ふより出かけ、最前より門口にて、樣子を聞いて居て、此とき、
仁左衛門一　小万、こりや得心して、縁を切つてやらねば成まい、
トいひ〳〵内へ這入る、
菊一　ヤア三五兵衛さん、
仁左衛門一　源五兵衛殿の御舍兄、樣子は承はつた、だん〳〵の御心

づかひ、すゐりやう致して、何とも氣のどく千万、

菊一　なる程、得心して縁切ませう、

仁左衛門ヤ、

菊一　サアいろ〳〵思案をして見れば、源五兵衛さんのお身のためになる事なら、さいぜんから兄御さんのお頼み、わたしや能う合點がゆきましたわいなア、

三津一　ヤア〳〵そんなら、眞實得心して、

菊一　アイわたしがのけば、お國の首尾も直り、なぎさ樣とやらと夫婦にならしやんす、源五兵衛さんの御身の納りとあれば、兄御さんのおたのみの通り、縁を切升る、のきますといふ心の内を、○推量して下さんせいなア、

トいろ〳〵こなしあつて泣く、

三津一　オ、道理ぢや、〳〵、よう得心してたもつた、それてこそ源五兵衛が命もたすかり、身共も悦び、エ、忝ない〳〵、

仁左衛門一　小万出かした、さすがは里にそだつたゆゑ、物事に辨へがあつて、三五兵衛もかんしん〳〵。身共も一旦そちに心をかけ、すさきの升屋での仕儀、なんでも源五兵衛めをと思うたが、又得心して見れば、竹馬の朋友、武士道にかゝはる儀でもなく、高で色のみち、あたつてくだけろ、いまてはさつぱりとおもひ切つて、とかく源五兵衛が爲になる事なら、とも〳〵に世話する、○是サ御舍兄、とてもの事に、小万が思ひ切つたといふ事を、源五兵衛に見せずば、めつ

三津一　たに國へは歸るまいぞや、

なる程さやう、しかし色里の事は、不案内の拙者、三五兵衛どの、そこをよろしく御差圖を、

仁左衛門一　なる程〳〵、しからば小万、　ト硯箱を引よせ、菊之丞にあてがひ、

源五兵衛への退狀かいてやりや、

菊一　エ、、

仁左衛門一　ハテ斯ういふ事を、みじん芥子程も知さぬがひみつ、何がなしに、いやに成てしまうたといふ、一通りの退狀を、

三津一　なる程、書た物でなくては、弟めが得心致すまい、

菊一　そんならあの、切文を書くのかえ、

仁左衛門一　縁切つたといふ慥な證據、

菊一　どうやらそれては、

三津一　ハテ、いつたん國元へ立歸た上では、身共が呑込で居るわいの、

菊一　若し源五兵衛さんが誠に、○イヤあの、誠に縁を切るのぢやによつて、

仁左衛門一　退狀がかんじん、　ト菊之丞思入あつて、

菊一　サア、わたしや、何う書いて能い事やら、　トふしやう〳〵の思入、

仁左衛門一　イヤ其文言は、身共がいうてやらう、

三津一　三五兵衛どの御世話ながら、弟めがな、とつくりと得心いたすやうに、

仁左衛門一　承知てムる、　トいふ時、菊之丞筆を取上る、仁左衛門側へにじり寄り、

まづそこへ一寸一筆申上参らせ候、是迄はそもじ様と、段々の御しんの程、嬉敷存じ参らせ候得共どういふ事にや俄に秋風、とんといやに成申候、七里けつぱい、此上は必ず〳〵逢ひに來ておくれなえ、

三津　なる程〳〵、

菊　どうもそれでは、

仁左衛門　ハテ、とつくりと聞えるやうにかゝんと、源五兵衛の爲にならぬ、

三津　さやう〳〵、

菊之丞始終こなしあつて、

菊　そしてどうぢやえ、

仁左衛門　あひに來ておくれなえ、最早私は弗つり思ひ切つて居るに

候○オヽすかん、オヽ、きらひ、縁切つたぞえ、○サ是では、どうやらおかしい文句になつたわえ、

菊　しばらく遠ざかり参らせ候でよいわいなア、

三津　イヤ〳〵、しばらくてはわるからう、

仁左衛門　一生、遠ざかり参らせ候、

菊　モシよいかえ、

三津　ト三津五郎思入れ、三津五郎こなし有て、

仁左衛門　さゝ承知〳〵、

一　生遠ざかり参らせ候、○もうそれでよからう、恐々謹言、

菊　イヤそれではない、めて度かしく、

仁左衛門　何の目出たい事があつて、ツイかしくでよいわいなア、

一　そりやどうなりと、時にあて名はしつかりと、さつま源五

兵衛様まゐる、さくらや小万判、イヤ判には及ばぬ、○ど
れ〳〵、　ト取て、篤とよみ、三津五郎に見せる、
三津一　フム○これでよろしうムり升るかな、
仁左衛門一　ずゐぶんようムる、　トとつて封じ、
菊一　サア上書は、さつま源五兵衛様櫻や小万、大急用、
なんのおそうてもよい事を、
トよろしく書く内、三津五郎、仁左衛門と顔を見合せ、こなしあつて、
仁左衛門一　そして此文は、だれに持せて、やるのぢやえ、
菊一　そりや身共が、ひそかにつかはす者がある、　トとる、
もうし兄御さん、おまへのおたのみ、源五兵衛さんのお身
の上どうぞ無事にと思ふから、あの通りの文はあげるもの

三津一　の、
コレ、そなたの恩は一生わすれぬ、
菊之丞むれをおさへ、癇のおこつたこなし、三津五郎ハツと介抱しようと
する、仁左衛門こなしあつて、
仁左一　是々、そこをよわつては、　ト三津五郎へかけて、
小万酒でおせ〳〵、御舍兄も心のきかぬ、おくへ伴ひ、う
さはらしに一つおすゝめなされ〳〵、
三津一　いかにも、小万大事なくば、　菊之丞こなしあつて、
菊一　こりや醉はにや○どうもならぬわいの、
仁左一　オ、それがよい〳〵、
ト歌になり、三津五郎こなしあつて、菊之丞を伴ひ、奥へ這入る、仁左衛
門殘り居て、いろ〳〵思入あつて、

五大力

仁左　時に此狀を○幸ひ彌助が奥に來て居る筈ぢや、彌助〳〵、

ト呼ぶ、奥より、

龍藏　オイ〳〵、おれを呼ぶはだれだ、　トいひ〳〵出て、

ヤ三五兵衞樣、今の首尾はどうでムり升る、

仁左　大極上々、まんまと退狀は此ごとくかゝせたて、

龍　そんなら小万が得心して、

仁左　往生づくめに何とどうぢや、

龍　イヤいきなものでムり升る、

仁左　彌助大儀ながら、其方は是を小万が渡したというて、源五兵衞へ屆け、先達ていひ合せた通り、とくと合點か、

ト狀をわたす、龍藏取て、

龍　お氣遣ひなされ升な、一旦、請合た彌助、やるものぢやムり升ぬ、

仁左衞門紙入より小判をいだし、

仁左　少しながら其狀の飛脚ちん、

龍　こりや五兩、テモ高い飛脚ちんな、

仁左　大事ない取ておけ、

龍　エ、有がたい、そんなら此狀を源五兵衞に、

仁左　必ずぬかるまいぞ、

龍　どれ、ひと走り往て參り升う、

ト唄になり龍藏狀を持てむかふへ遣入る、仁左衞門後を見送つて、

仁左　是から理づめて、小万は身共になびかにやならぬ、ム、、

五大力

トうまいというこなしにて居る所へ、向ふより勘左衛門、序幕の役にて出て來る、

勘左一　これは〳〵三五兵衛殿、先程から土橋の大野屋方に、相待居り升た、

仁左一　伴右、先達てお身に申合せたる是此、

ト我がふところへ思入して、

仁左一　ナ、千里一飛、出世の出だち、

勘一　サア其儀について、拙者方に手筋もムればこれ、

ト仁左衛門へさゝやく、

仁左一　それは執着、万事は後刻とくと、

勘一　しからば、土橋の大野屋方に相待をり升、

仁左一　大ぶん機先がよくなつた、今宵は身共が振まひぢや、大野屋方で、存分ふざけさつしやい、

勘一　それはかたじけない、然らば三五兵衛どの、

仁左一　伴右はやく、

勘一　ハツ、

ト唄になり、勘左衛門引かへしむかふへ這入る、此唄好みあり、奥より菊之丞口幕の三味せんを持て、酒に酔ひたるこなしにて出て、

菊一　オヽ三五兵衛さん、まだ爰にかいなア、

仁左一　小万なんぢややら三味せんを持て、酔うたな〳〵、

ト仁左衛門あたりを見廻し、よい所へ來たといふ思入れ、

菊一　アイ心はよはぬけれど、むしやくしやするので、

トこなしある、仁左衛門三味せんを見て、

仁左　其三味せんには、てんがう書が、

菊一　エ、これかえ、

仁左　五大力とは、

菊一　こりや歌のげだい、今上方ではやる五大力、私もならふに

仁左　よつて、わすれぬやうにひかうと思うて、めつさうな見や

菊一　しやんせ、三味せんへ書いておいたわいなア、

仁左　五大力とは、大坂の住吉の奥の院にあるのか、

菊一　そんな事は知らぬわいなア、

仁左　イヤ小万、源五兵衛を退いたそちが今の心は、

菊一　さつぱりとしたわいなア、

仁左　何をうそらしい、やつぱり心が殘つてあらうが、

菊一　そりやまんざら殘らぬではないわいなア、ちやうど殿たちでも、さうぢやげな、何ぞかはりが出來るまでは、どうしても思うて居るものぢやといなア、

仁左　其かはりは出來てあるの、トこなし、

菊一　わたしらがやうなものは、大ていの事では、

仁左　イヤ、ツイ出來る、

菊一　なんのまあ、

仁左　イヤ、さつそく今爰で出來すぎてある、

菊一　そりや何をいはしやんすぞいなア、

仁左　小万、いつたい此三五兵衛はそちに、イヤこりやいはいて

も、是までとつくりと合點な筈、いつたん武士のいきづく、思ひ切つたといふ物の、源五兵衛さへさつぱりと譯がたつたら、身共が心にしたがうても、小まん大事あるまいがな、

菊一　サアわたしも、是迄段々といつて下さんしたおまへ、いつそつらあてに、

仁左一　ヤア、

菊一　とサア、思うては居るけれど、もし夫婦になつてお國へ往たをりには、同じ家中て傍輩の事、源五兵衛さんと顔見合さねばならず、それも一旦切れたによつて、わたしやかまはねど、おまへがどうやら、あぢいな物ではないかいなア、

仁左一　イヤ〳〵、そりや氣遣ひはない、殊に寄ると身共は國取大名になる、

菊一　エ、、

仁左一　サア今迄のやうに、千島の家中では居ぬ、とはうもない出世して見せる、若、又それがゆきそこなうても、どんな事があつても源五兵衛が、トいはうとして、

菊一　サア、源五兵衛とは、顔はあはせはせぬ、又一所にも居はせぬわいのう、

仁左一　そりやマア耳よりて○ムんすなア、

菊一　耳より所か、うかみ上ることぢや、

仁左一　サア其うかみ上る出世、おまへが大名にならしやんすといふ、なんぞ慥な事があるかえ、

仁左　ある〳〵、石橋をたゝいてわたるよりは、まだ〳〵丈夫な事ぢやて、

菊一　サア、其譯はどういふ事ぢやえ、

仁左　其譯は、此度御用、ト云はうとして、

菊一　イヤめつたにいはれぬ、

仁左　そんならうそぢや、

菊一　イヤうそでない、大しんじつ、

仁左　さういうて、やつぱりわたしをだまさうとは、テモこはい

菊一　三五兵衛さんではあるわいなア、

仁左　イヤ小万、身共が出世するにちがひはない、其譯はめつたにいはれぬ大事の事、それが聞度ば、ト手をとつて、

菊一　身共が心に從うた上で、いうてきかさう、

仁左　エ、、トこなし、

菊一　ハテ身共よりは、そちがまこと心にしたがふ氣なら、大事の事も打あけていうて聞さう、

仁左　それにちがひはないかえ、

菊一　何違ひ有うぞ、そちもちがひがなければ、幸ひ此三味線へ、

ト筆をとつて、書かうとする、菊之丞とめて、

仁左　ア是めつさうな、此三味せんへ何を書くのぢやぞいなア、

菊一　ハテ、ツイ斯うぢや、

ト菊之丞が手をむりに持添て、五の字の上へ、三の字を書き、力といふ字へ土へんをかゝせる、

五大力

一菊　是ては五大力が、
一仁左　三五大切、何と身共にのり替るといふ、そちが起請どうぜんぢや、
一菊　ほんに三五大切と、○それでは、
一仁左　めつたには消さゝぬ、ト三味線をわきへよせ、
一菊　此上は小万、
一仁左　どうするのぢやいなア、
一菊　ハテ、心に從ふ事は得心ではないか、
サア、得心は得心ぢやが、ほんに今夜は、おまへも知つての通り、氣がもや〳〵して、どうやらしんきなによつて、
又翌日のばん篤くりと噺をせうわいなあ、

一仁左　ム、すりや、あすのばんに、ちがひなう、
一菊　サア、こちらはあすのばんに極めておいて、おまへの大事を、
一仁左　イヤ、さううまうはのられぬわい、
一菊　まだほかに何やかや、尋ねたい事があれば、
一仁左　然らばさいはひ、あの二階て、
一菊　はなしをせうかえ、
一仁左　そんなら小万、
一菊　あれまだいのう、
一仁左　デモ、聞事があるぢやないか、
一菊　それぢやによつて、

仁左
一　ハテおちやといふに、

ト菊之丞をつれて上の二階へはろひ、唄になり、向ふより宗十郎、龍藏、最前の切文をひろげて見せながら、宗十郎をたきつけ〳〵出て來る、

龍藏
一　源五兵衛さん、おまへさんはどう思つてムり升るぞ、斯ういふ切文を見ては、すみますまいぞえ、〳〵、此彌助でさへ、腹が立て〳〵、なりませぬわいなア、

ト色〳〵いひながら、出て來る、宗十郎かまはず、

宗十郎
一　ハテよいわい、小万が心は、とくと身共が存じて居る、

龍
一　アレ、まだそんなぬるい事をおつしやつてぢや、小万さんは、とうに心がくさつて、もうおまへがいやになつたのだ、其證據は、これ此切文、

宗十郎
一　サア、それになんぞ譯があらう、身共がとつくりといつておいた事もあり、今さらどうして、あれが心が替るものか、

龍
一　ア、、おまへさんに金を持したいなア、よい客仁だ、うか〳〵とだまされるもしらず、おまへの鼻毛で、小万樣の下しめが出來る、エ、はがゆい、お侍に似合ぬ、あんまり買じやうがない、買じやうがムりませぬぞえ、

宗十郎
一　ハテ扨、其やうにいら〳〵いはずと、一つのまう、來やれ、

ト龍藏やはりしか〳〵あつて、本舞臺へつれ立來り、ずつと内へ這入る、所へ奥より市松、万代、ふく吉、つちの助、つれ立出て、

皆々
一　エ、源五兵衛さま、

宗十郎
一　トはつと心づかひのこなし、こりやおさき、けた〻ましい、何事ぢや、

皆々　イエ、ようお出なされ升た、　ト心遣ひのこなし、

宗十郎　小万はどうぢや、來て居るか、

市松　ハイ、○いゝえ、

宗十郎　ム、來ては居ぬか、

龍蔵　イエ〳〵、來てゞムり升る、おさきどん、わるいじやうだんだ、あれ程さつきわしがおくつて來たものを、今夜は爰の直しにまでしてある物を、

市松　サアそれでも、　ト龍蔵へこなし、

龍　まざ〳〵しい事をいひなさる、奥であらうがな、

市　イヤ小万さんは、たしか最前あいてもどちしやんしたわいなア、

ふく、つち　イ、エ奥にぢやわいなア、

市　アゝこれ、○歸らしやんしたを、おまへがたは知らしやんせぬのぢやわいなア、　トのみこませる、

龍　現在居る物をあんまりだ、

宗十郎　よいわい、彌助、かへつたら歸つたにしておけ、○おさき、たばこぼんをかしやれ、

市　ハイたばこぼんは、○奥や二かいへ皆出て有が、おさちあいたのがあるかいの、　ト万代へこなし、万代のみこみ、

万代　イエ〳〵、皆ふさがつてムり升る、それに臺所に火もなし、

龍　こりやもう、見る事、聞事がむかついて來るわえ、

宗十郎　ハア火がなくば、たばこものむまい〳〵、　トきせるかしまひ、

五花大力

市一　おさきや、彌助にものましたい、酒を一つ呑うか、

宗十郎一　イエ〳〵、さかなが何んにもムりませぬ、

万代一　肴がなくば、ツイうなぎの蒲やきでも、取にやりやれ、

　さつき取につかはしましたが、いてうやも、横町のも、魚

　切れだというてぢやわいなア、

宗十郎一　ムゝそんなら酒ものむまい、こりや〳〵ふさ、さき、どう

　ぢや、ちと爰へ來て、うかしてくれい、せめて我たちなど

　咄し相手に、

市一　此子たちも、奥の客仁をしまはずぢやわいなア、

龍一　ふく、源さん、もうかへらしやんせいなア、

　もうこたへられない、いま〳〵しいぞよ、なんでさう客を

　あしくするのだ、エ、聞えた、こりや何、源五兵衛樣がぶ

　ざがあるによつてか、いとしなげに、いかに今浪人してム

　るとて、さう見せつけぬものだわえ、これも大方、小まん

　さんがきれたによつて、とゞけてあるのであらう、エ、義

　理を知らぬやつらだ、よいわ、大事ムり升せぬ、其金はお

　れが拂ふ、此彌助がはらう、廻してそして居れ、金は此と

　ほりだ、

　トさいぜんの五兩の金の入りたる紙入を出して、宗十郎が前へなげ出し、

宗十郎一　なんぼなりと、拂つておしまひなされませ、

龍一　彌助、もうよい〳〵、何もいふな、たかて女子の事ぢや、

　テモ、あんまりでムり升る、

五六力

宗十郎　サア〳〵、よいてや〳〵、こりやおさき、伊三郎を呼べ、

市　モシこちの人〳〵、ちやつとムんせいなア、

傳九郎　オイ〳〵、なんぢやさわがしい、ト いひ〳〵出る、

市　あれ來てぢやわいなア、ト宗十郎をさして、

傳九郎　ヤ源五兵衛樣、ト もみ手をして、氣の毒の思入れ、

宗十郎　伊三郎外の事てもない、先達て身共が拂殘りは、如何ほどあつた、

傳九郎　ハイ○オ、それは書出しておきました、ト かけ硯より出して、小万さんの約束、大和町への駕籠ちん、酒肴菓子、付出して此とほりてムり升る、ト宗十郎に書付をわたす、

宗十郎　ムゝ〆て四兩二分とある、

傳九郎　ハイさし引のこりてムり升る、

龍　モシそこに五兩ムり升る、拂てお仕廻被成ませ、

宗十郎　彌助、此金をしばらく借請てもくるしうないか、

龍　大事ムり升せぬ、其金をしやつゝらへぶつ付ておやりなされませ、いつたいお前さんが結構すぎ升るから、あいつらがしたいやうにいたします、ト 此内宗十郎紙入の金を出し、

宗十郎　是金が五兩ある、四兩二分引いて、殘りは祝儀に取ておきやれ、ト 投げ出す、

傳九郎　ハイ、これはありがたうムり升る、

宗十郎　彌助、身共はもう歸らうわえ、

龍　エゝ、

五大力

傳九郎　もうお歸りなされ升るか、ようお出被成升た、
一市　表をしめて、もう寢ようわいなア、
宗十郎是を耳へもかけず、立もどらうとする、
一龍　モシお前さん、それでは小万さんに、
一宗十郎　なんの、あはいでもよい、あすのばんに出なほして來るわ
え、　ト行かうとする、二階より仁左衛門、捨ぜりふにておりて來る、
一仁左　ハテ扨、何の歸らう、さうとめいても、ぜひ今宵は泊ると
いふに、　トいひ〳〵宗十郎と顔を見合せ、
一宗十郎　ヤア、惡い所へ源五兵衛どの、　トわざとこまるこなし、
一傳、市　ム、三五兵衛どの、
こりやひよんな、　トきのどくな思入れ、

一仁左衛門　ハテ大事ない、酒にしよう〳〵、
一市　これいなア、何ぞお肴をこしらへさしやんせぬかいなア、
一万代　サア〳〵おたばこぼんを、　トたばこぼんを持て來る、
一ふく、　火があるかいなア、
一傳　早うお肴を、いひつきやいのう、
一市　アイ〳〵、お前方もちやつと三味線を取てお出いなア、
一ふく、　アイ〳〵、
一傳　しよくだいも持てどう、
一市　サア〳〵、闘しい、早うあげねばならぬぞえ、
ト皆々やかましくいひ〳〵奥へ這入る、宗十郎こなしあつて又下に居る、
龍藏もこなしあつて、

五大力

龍一　エ、、げんきんな奴らぢやないか、

ト わざと宗十郎が腹の立つ様にいふ、仁左衛門こなしあつて、

仁一　小万〳〵、爰へきやれ、エ、ぐず〳〵と埒の明ない、

ト いひ〳〵、二階より菊之丞を無理に連れて來る、菊之丞宗十郎を見て、はつと思入、仁左衛門側へ引つける、

仁一　ハテ、そのやうにうぢ〳〵する事はない、こゝに居やれ、

龍一　アレ〳〵あのざまを御らうじませ、

宗十郎一　小万、そちや今まで二階に居つたか、

ト 菊之丞ものいはずに思入、仁左衛門こなしあつて、

仁一　イヤ〳〵源五兵衛殿、何にも仰せられな、サア存分にさつしやい、

宗一　ヤ、

仁一　ふむなりと、たゝくなりと、此三五兵衛を心まかせに、こりやコレ、いつぞや洲崎の升屋にて、身共が打擲致した通りに、サア存分にめされ、手むかひも致さず、一言の申分もムらぬ、

宗一　そりや何ゆゑ、

仁一　小万ゆゑ、

ト 宗十郎思入、

菊一　エ、、それ最前わたしに、

仁一　ハテだまつて居や、大事ない〳〵、武士の身の上なれど、そなた故なら何とも思はぬ、けつくかまひだてすると、源五兵衛どの〻腹が、餘けい立わいの、

菊一　エ、、さうぢやない、わたしや源五兵衛さんの、

ト こなしある、此内、中二かいの障子を明け、上の方に三津五郎、下の二かいに東蔵、様子をうかゞひ居る、

仁一　あれ、

ト こなしにて菊之丞へ二階ををしへる、菊之丞二階を見る、三津五郎こなし、菊之丞ハツトこなしあつて、下の二階を見る、東蔵とりなはをもつて思入、菊之丞はいろ〳〵じゆつなきこなし、

菊一　エ、どうもありやうには、ト思入、

宗十郎一　小万、先程大身の客仁ぢやというて、駕籠まで持て迎に來たは三五兵衛殿か、

菊一　イエ〳〵、そりやほかに、

ト いはうとして、三津五郎が方を見る、三津五郎こなし、

仁一　イヤ、成程外の客仁というて、呼よせ升たは身共でムる、

菊一　やう〳〵と小万も得心致した、

なんのまあ、わたしが、

ト いはうとして三津五郎が方を見る、三津五郎をがむ、東蔵はなはさばきをするゆゑ、菊之丞いふにいはれぬこなし、

菊一　サア、どうもいふにいはれぬ、義理といふ柳がかゝつてな、

仁一　どうやら斯うから得心の致した、

宗一　ヤ、ト おもひ入、

龍一　あれ得心だと〳〵、エ、これ、あゝいふ事を聞ちやア、おれでさへどうも腹がぐら〳〵とにえかへるやうだ、是が又女郎衆なら、千人万人の内に誠を立るはたつた一人、其代

五大力